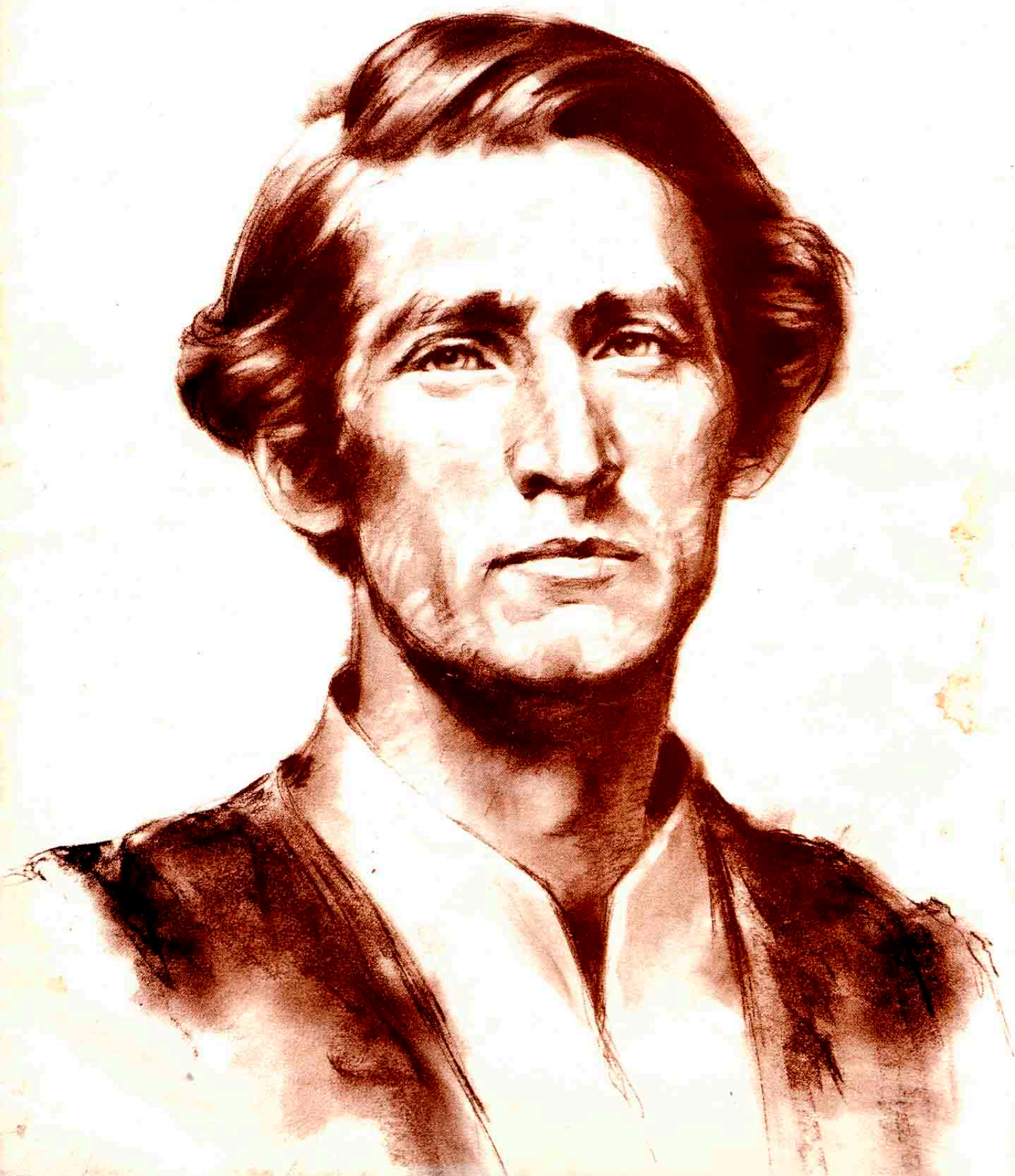


聖徒の道 1973 9





1971年10月
ダイヤー長老による
大会説教からの抜粋

同時に良いことと悪いことの両方に熱中できるという考え方には危険なところがある。昔、イエスは言われた。「だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。」そのような者は、一方を憎んで他方を愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるからである。使徒ヤコブは、常に悪を従わせ、正義を選ぶことの重要性を力説していた。ヤコブは、正義と悪とに兼ね仕えようとする者に、「そんな人間は、二心の者であって、そのすべての行動に安定がない」(ヤコブ1:8)と言っている。

悪を従わせて善を選ぶこと、不正を従わせて正義を選ぶことは、人生において達成し得る最も貴い事柄であり、そうすることによって、人は創造主の傑作となり、この試しの世の根本的な目的を成就することができるのである。このことについて、古代の予言者は次のように述べている。「……自分の心を治める者は城を攻め取る者にまさる。」(箴言16:32)

アルビン・R・ダイヤー
十二使徒評議員会補助

聖徒の道

1973 9月号

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

ハロルド・B・リー
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

スペンサー・W・キンボール ハワード・W・ハンター
エズラ・タフト・ベンソン ゴードン・B・ヒンクレー
マーク・E・ピーターセン トーマス・S・モンソン
デルバート・L・ステイプラー ボイド・K・パッカー
リグランド・リチャーズ マービン・J・アシュトン
ヒュー・B・ブラウン ブルース・R・マッコンキー

諮問委員会

J・トーマス・ファイアンズ (内務伝達部長), ジョン・
E・カー (配送・翻訳部長), ドイル・L・グリーン (教
会誌編集主幹), ダニエル・H・ラドロウ (教育資料担当
主幹)

統一誌編集主幹

ラリー・ヒラー

日本語コーディネーター

八木沼修一

ローカル編集

高木まりゑ

ステーク本部・伝道本部住所

東京ステーク本部 〒107 東京都港区北青山3の6の4
TEL (03-407-2465)
大阪ステーク本部 〒560 大阪府豊中市岡町北1の12の3
TEL (06-852-3734)
日本東伝道本部 〒063 札幌市中央区北2条西24の245
TEL (011-611-3697)
日本伝道本部 〒106 東京都港区南麻布5の8の10
TEL (03-442-7438)
日本名古屋伝道本部 〒464 名古屋市千種区鹿子町5-27
TEL (052-782-3555-6)
日本中央伝道本部 〒657 神戸市灘区篠原本町4の6の28
TEL (078-881-2712-3)
日本西部伝道本部 〒810 福岡市中央区平尾浄水町46
TEL (092-52-6048)

も く じ

律法の法則	マリオン・G・ロムニー	386
主の羊の群れ	カーティス・E・レッドベター	388
聖典の神聖な起源	ジェームズ・R・クラーク	396
リー大管長との交流	ジョン・A・トベットネス	400
教会幹部の話	ハロルド・B・リー	402
質疑応答		404
タレントショー	ビビアン・バーソロミュー	405
神の人 エリヤ		408
おもちゃばこ		410
ひつじかいの少女	ジュデイー・ケイプナー	412
神権者に与える勧告	ハロルド・B・リー	413
神権と神権を管理する職	N・エルドン・タナー	420
今、他の予言者をまた送らる		
	マーク・E・ピーターセン	425
話す時間をとりなさい	ジョージ・S・デュラント	429
ローカル・ニュース		430

聖徒の道 9月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-8-10
配 送 東京ディストリビューション・センター
東京都港区南麻布5-10-25
定 価 年間予約 1,300円 1部 130円
海外予約 1,800円

律法の法則

第二副管長 マリオン・G・ロムニー

主は言われた。「そもそも創世の以前より天に於て定められた一つの変らざる律法ありて、あらゆる祝福はこれに基くなり。

すなわち、われら何にても神より祝福を受くる時は、この祝福の基く律法に従うによりて然るなり。」(教義と聖約130:20, 21)

この宣言を読むと、支配の律法に従順でなければ、いかなる分野においても、いかなる場所においても、永遠の進歩はあり得ないと思われる。私たちは、これが天において真実であることを知っている。主が次のように言われたからである。

「……およそ律法によりて支配さるる者はまた律法によりて護られ、これによりて全くせられ聖くせらるるなり。

律法を破り律法を守らずして己れの欲するところを行わんとし、進んで罪(律法を破る罪のこと)の中に住りまた全く罪の中に住る者は、律法によりてもまた愛憐、正義、審判によりても聖くせられ得ず。……

……審判は王座に座してすべてのものを支配しすべてのことを執り行う者の前に行くなり。

……彼は昔より万物に一つの律法を与え、この律法によりて万物は時と期に随い運行を止めざるなり。

而してこの運行の道は定まりて動かず、正に天地の道にして地とすべての遊星に通ずるものなり。」(教義と聖約88:34, 35, 40, 42, 43)

この聖句から、神の摂理にあるものはすべて、たとえ私たちには生命のないもののように見えるものに至るまで、それを支配する律法に従っていることがわかる。

「……(例えば)地は日の栄の王国の律法に従えり。そはその創られたる目的を満たして、律法を犯すことなければなり。」(教義と聖約88:25)

「これを以て、……地は……父なる神の御前に在ると言う光栄の冠を受くべければなり。

これ、日の栄の王国に属く人々は限りなくいつまでも地を所有せんがためにして、……

またわが汝らに与えたる律法、すなわち、キリストの律法(つまりキリストの福音、完全な自由の律法のこと)によりて聖められざる者たちは別の王国……をつがざるべからず。

そは、日の栄の王国の律法に従う能わざる者は日の栄に堪うる能わざればなり。

また、月の栄の王国の律法に従う能わざる者は月の栄に堪うる能わず。

また、星の栄の王国の律法に従う能わざる者は星の栄に堪うる能わず。」(教義と聖約88:19—24)

神から啓示された御言葉によって護られている私たち末日聖徒は、何と祝福されていることであろうか。その御言葉によれば、来世にも何らあいまいなことがなく、律法の法則は変わらず、だれでも皆、自分の従った律法によって報いを受けるのである。また、神聖な律法はすべて、厳粛な律法として変わることがなく、きのうも、きょうも、いつまでも変わることがなく、審判も慈悲に満ちたものになるであろう。しかしそれは律法に従って厳格に行なわれるし、正義の原則を損うこともないのである。末日聖徒は、「律法の法則」に関する知識を持っていることによって祝福されているだけでなく、自分が裁かれる基準となる律法を知り、理解していることによって二重の祝福を受けているのである。

「完全な自由の律法」(ヤコブ1:25)の知識に照らして考えるとき、この律法に従わないでいるということは、何と近視眼的であり、愚かなことであり、また悲しむべきことであろうか。

「キリストの律法」はすべてのものを含んでいる。その律法は、墓のかなたを支配している法則に関係しているだけでなく、この場所の、この時点の自然の法則にも、しかも、地方や一國、世界を問わず、関係しているのである。



末日聖徒たる者は、その居住する地の政府の法律に厳格に従うべきである。私たちは、私たち自身の手になる信仰宣言によって、政府の法律に従うよう戒められている。それは世に向かって次のように宣言しているからである。「われらは王、大統領、統治者、長官に従うべきを信じ、また法律を守り、敬い、支うべきを信ず。」(信仰簡条第12条)

私たちは、主の戒めと調和して、これを果たすのである。

「何人もその国の律法を破ることなかれ。そは神の律法を守る者はその国の律法を破る要なければなり。

この故に今ある権力に服従し、統治すべき権能を持ちてすべての敵を脚下に踏みつくる者の統治する時の至るを待つべし。」(教義と聖約58：21，22)

「世俗の権威の原則は、その起源を神聖なものに負っている。それは、多かれ少なかれ人の必要性に合わせて作られ、大概、正当で有益なものである。この制度がいくら悪くとも無政府状態よりはよい。政府の転覆を謀る革命運動は、それ自体、神の律法に反している。……(『教義と聖約注解』[英文] P. 339)

「律法の法則」が、家庭で、地域社会で、国家で破られるとき、それは混乱が世を支配するときである。

天の王国は、混乱とは無縁のものである。それは、天の王国には、自由意志によって王国の律法に従わないような者はだれひとりとしていないからである。

末日聖徒は、その居住する地の憲法を初めあらゆる神の律法に厳格に従うべきである。しかも、善良な、正直な気持で従うのである。

道徳の退廃と法律無視の著しい現代にあって、私たちが皆、十戒に照らして自分自身の行動を考えてみることも、あながち無益なことではあるまい。十戒は神の基本的な律法であるばかりでなく、ユダヤ、キリスト教社会の世俗の律法の根本を形成するものなのである。

「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。

あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水のなかにあるものの、どんな形をも造ってはならない。

あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱えるものを、罰しないでは置かないであろう。

安息日を覚えて、これを聖とせよ。

主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。

あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである。

あなたは殺してはならない。

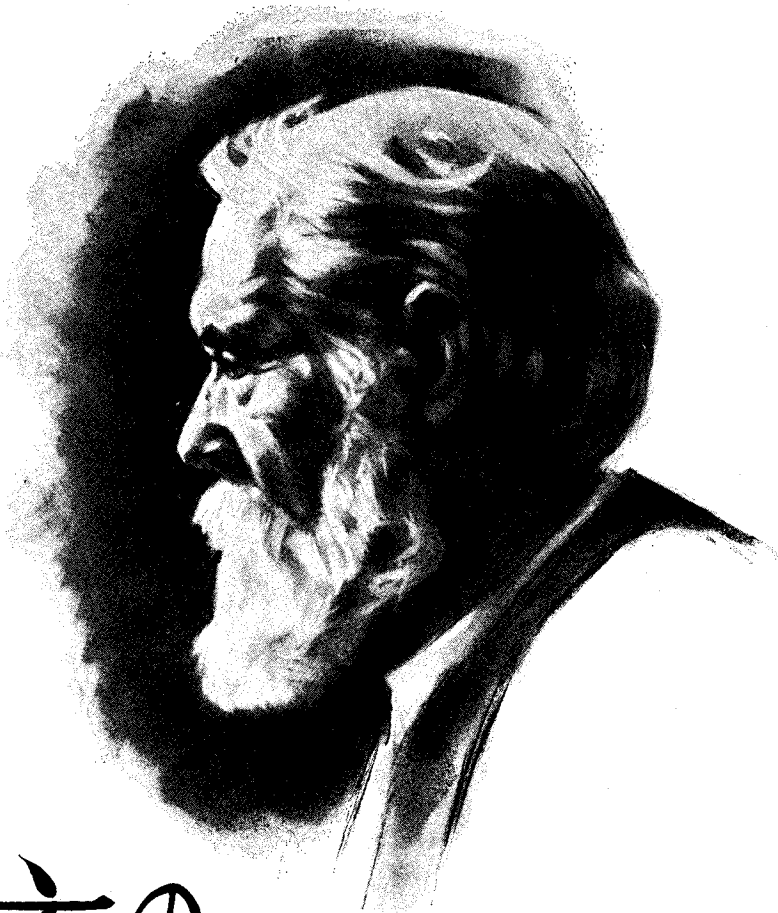
あなたは姦淫してはならない。

あなたは盗んではならない。

あなたは隣人について、偽証してはならない。

あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。」(出エジプト 20：3，4，7，8，11—17)

『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ。』第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。』という、いちばん大切な第一の戒めを守る精神で、今まで述べてきた律法に厳格に従うなら、人はだれでも国の法律に従い、またこの現世の生涯で適用できるものとして、日の栄の王国の律法にも従うのである。



主の羊の群れ

カーティス・E・レッドベター
ブリガム・ヤング大学
教会歴史・教義学助教授

救い主イエス・キリストは、地上で伝道されたとき、様々な階層の人々に出会われた。この人々は人生を左右する重要な思想を形成し、それぞれ永遠の将来を定める行動に移ったのであった。ここに取り上げた人々は、救い主と深いかかわりあいを持ち、福音のおとずれに対してそれぞれ独自の反応を示した人物である。彼らは皆新約聖書の四福音書と切っても切れない関係にある。

アンデレ

イエスがヨルダン川でバプテスマを受けてからしばらくして、アンデレともうひとりの同僚は、ふたりが神のまことの予言者と信じているバプテスマのヨハネと話していた。すると突然イエスが彼らの方へ歩いてこられた。そこでバプテスマのヨハネは主に目をと

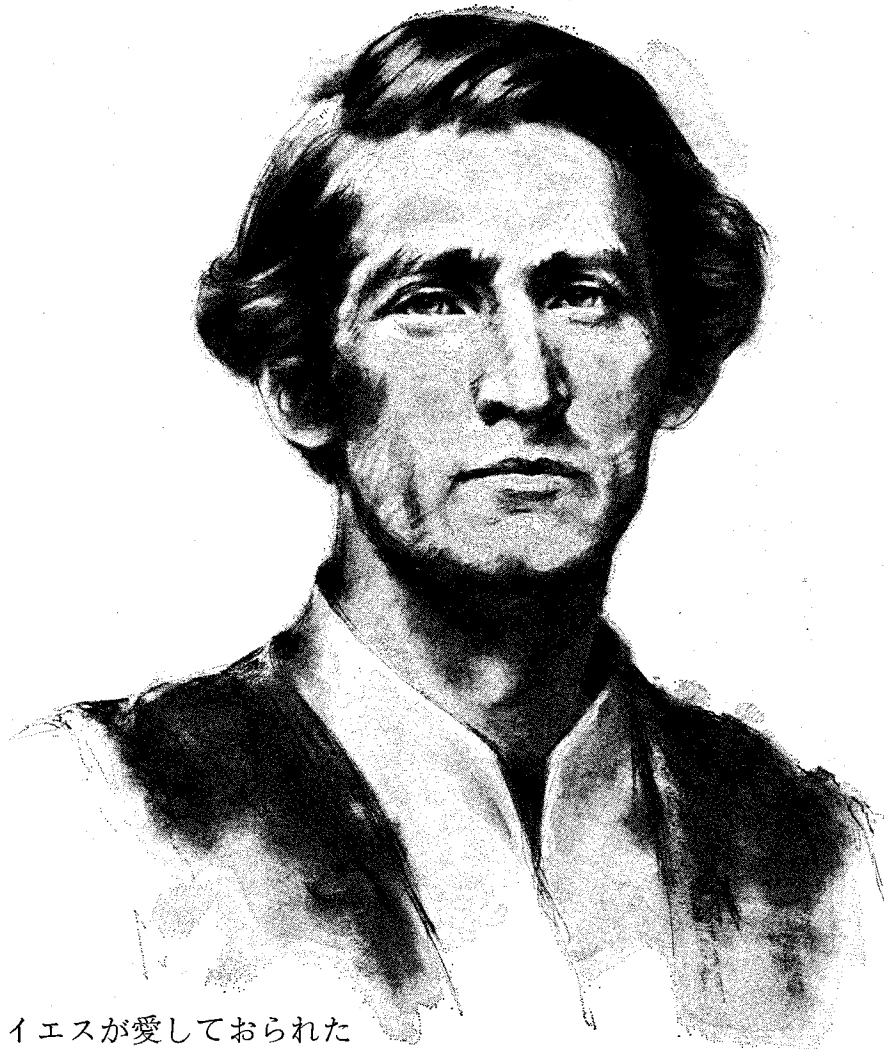
めて、「見よ、神の小羊」と言った。アンデレはそのとき以来、イエスこそキリストであるという証をもって立ち去った。そしてそのまま主に従ったのである。（ヨハネ 1：35—37）

アンデレはメシヤを見出して心を躍らせ、この良い知らせを兄弟のシモンに伝えに急いだ。そして「わたしたちはキリストにいま出会った」と告げた。それは揺れ動く信仰とか、定まらぬ証、中途半端な確信などというものではなかった。アンデレは不動の確信を抱いていた。決心を固め、主に全幅の信頼を寄せていた。だからこそ彼は兄弟のバルヨナ・シモンをキリストのもとへ連れていくことができたのである。（ヨハネ 1：38—42）

アンデレはほかの人々もキリストのもとへ連れて行った。大勢の群衆がイエスの教えを聞くために集まったとき主は彼らが空腹なのを見てとり、言われた。「どこからパンを買ってきて、この人人に食べさせようか。」それに対してアンデレはイエスに言った。「ここに、大麦のパン五つと、さかな二ひきとを持っている子供がいます。」アンデレは本当に男の子をイエスのもとへ連れてきた。そこでイエスはさかなとパンをふやして、群衆に食べさせたもうた。（ヨハネ 6：1—14）

イエスがエルサレムに勝利の入城をし、十字架の受難を数日後に控えた、生涯も最後に近づいた頃、ギリシャ人が何人かピリポの所へ行き、イエスに会いたいと申し出た。ピリポはすぐアンデレの所へ行き、ふたりで異邦人の探求者を主のもとへ連れて行った。（ヨハネ 12：20—24）

アンデレはイエスと出会って以来、終始ひとつの変わらぬ召しを受けていたようである。それは人をキリストのもとへ連れてくることであった。



イエスが愛しておられた

ヨハネ

ゼベダイの子ヨハネは、ヤコブの兄弟であった。(マタイ4:21) このヨハネの母サロメは、イエスの母マリヤと姉妹の関係にあったと思われる。(マタイ27:56, ヨハネ19:25)

バプテスマのヨハネがイエスを指して、神の小羊である、と宣言したときアンデレのほかにもうひとり弟子がいたが、これは疑いもなくかつてバプテスマのヨハネの弟子であったこのヨハネその人であった。(ヨハネ1:35-40)

後にイエスは、ヨハネと兄弟ヤコブに、網をおいて私についてきなさい、と言われた。(マタイ4:21, 22) そして間もなくヨハネは、使徒に聖任されたのである。(マタイ10:2)

イエスはヤコブとヨハネのことを、ホアネルゲ、すなわち、雷の子と呼び

たもうた。これは明らかにふたりの気性からきたものであった。(マルコ3:17) キリストの名によって悪霊を追い出している者を見てやめさせ、主からその必要はないとたしなめられたのは、このヨハネであった。(ルカ9:49) またイエスがサマリヤの村で拒まれたとき、天から火を呼び下してやりたいとも言っている。(ルカ9:52-56) さらにあるときヨハネは母親と兄弟と一緒にあって、王国に入った暁はイエスの横にすわる栄光を賜りたいと願ひ出ている。(マタイ20:21, マルコ10:37-40) 彼らは当時まだ福音の真髄を悟っていなかったのである。

それでもヨハネは、主がヤイロの娘を死からよみがえらせたとき、他のふたりの使徒と共にそばにるように選ばれている。(マルコ5:37-43) ま

た変貌の山で、救い主とモーセ、そしてエリヤは、神権の鍵をペテロ、ヤコブ、ヨハネに与えている。(マルコ9:2-10) 最後の晩餐の席で、ヨハネはイエスの隣にすわっていた。(ヨハネ13:23) またイエスは園で苦悩を味われたとき、ペテロとヤコブ、ヨハネを連れて行かれた。(マルコ14:32-34)

ヨハネがこのような特別扱いを受けるのは、理由のないことではなかった。というのは、イエスがゲツセマネの園で捕われたあと、救い主のあとをつけて大祭司の宮にまで入り込むという勇気を示しているからである。(ヨハネ18:15)

十字架の場にいたと記されている十二使徒は、ヨハネただひとりであった。そこでイエスが母マリヤをヨハネの世話に託したところ、ヨハネはその責任を引き受けている。(ヨハネ19:26, 27)

ヨハネは兄弟のヤコブと同じく何をするにも火のような熱意に燃え、主のためには死をも恐れない覚悟ができていた。(マタイ20:24) ヨハネは教えをよく吸収できる弟子であり、何よりも主のみこころにかなった者になりたいと望んでいた。

ヨハネはペテロと共に主からエルサレムにつかわされ、最後の晩餐に先だって過越の食物を用意している。

人を変えるキリストの力は、ヨハネを犠牲と愛の人、柔和な人に変えた。ヨハネは、深い霊的な洞察力を持ち、人を愛する特質に恵まれた人、同情する力に富んだ人となった。

人類を愛されたキリストを宣べ伝えるのがヨハネの使命であった。ヨハネは、人々を主のもとへ導くため、人生を延ばして欲しいと願ひ出た。それでその望みどおり、主が再び来るまで地上にとどまるだろうという約束を得た。

(ヨハネ21:20-24, 教義と聖約7:1-3, III ニーファイ28:6-10)



ニコデモ

イエスが最初の宮きよめが終わったばかりのことだった。その夜、パリサイ人でサンヘドリンの一員であったニコデモが、イエスのもとに来て言った。「先生、わたしたちはあなたが神からこられた教師であることを知っています。神が一と緒でないなら、あなたがなさっておられるようなしるしは、だれにもできはしません。」(ヨハネ 3 : 2)

イエスは直ちに核心について答えられた。

「よくよくあなたに言うておく。だけれども、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない。」(ヨハネ 3 : 5)

この教えはニコデモにとって初めて聞く奇異な考えであった。イエスはさらに、もし福音の第一原則が信じられないなら、永遠の奥義はとても信じられないだろう、とニコデモに言われた。この夜の真剣な会見の後、ニコデモの

冷淡な態度は徐々に変わっていった。

後にサンヘドリンの会合で、イエスが詐欺師呼ばわりされたとき、ニコデモは勇敢にもこう問いただした。律法によれば、まずその人の言い分を聞いた上でなければさばくことをしないのではないかと。(ヨハネ 7 : 50—52)

ニコデモはこのとき勇気をふるって意見を述べたが、同僚たちはイエスを弁護するニコデモに批判的であった。

イエスの死後、ニコデモは、没薬と沈香をまぜたものを百斤ほど持って、イエスの埋葬の準備を手伝っている。

(ヨハネ 19 : 39)

ニコデモがどの程度救い主の勇敢な弟子になっていたか明らかではない。しかし、もしニコデモが救い主の勧告を受け入れていれば、イエスからもう一度生まれ変わらなければならないと言われた夜に、霊的な生命が胎動し始めていたことだろう。

マリヤとマルタ

ベタニヤにラザロという兄弟と住んでいたマリヤとマルタは、しばしば家を訪れたイエスと親交があった。ルカは、マルタという名の女がイエスを家に迎え入れた、と記している。(ルカ 10 : 38)

記録されている限り、イエスが初めて彼らの家を訪れたもうたとき(ルカ 10 : 38—42)、マルタはイエスに食事を用意したいと願った。一方マリヤはイエスの語る真理の言葉に耳を傾けていたと思った。忙しく準備に余念のなかったマルタは、マリヤが食事の用意を一向に手伝わないので、不満であった。イエスはマルタのかいがいしい働きに感謝したが、体に食物を与えることに専念する余り、霊を犠牲にすることは危険であるとマルタに警告された。物質的な事柄も役に立つし、良いものであるが、霊的な食物はなおさら必要である。

マリヤとマルタは、ラザロが死からよみがえるときその場にいた。最初マルタは兄弟の死を知らせに、救い主の所へ急いだ。マルタは言った、「主もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかったでしょう。」続いて大いなる信仰を示して言った。「しかし、あなたがどんなことをお願いになっても、神はかなえて下さることを、わたしは今でも存じています。」



イエスはマルタに言われた。「あなたの兄弟はよみがえるであろう」。

マルタは復活のことを言われたのだと思って、こう言った。「終りの日のよみがえりの時よみがえることは、存じています。」

そこでイエスは優しくマルタに次のことを思い起こさせたもうた。「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれ信じるか。」(ヨハネ11:25-26)

そこでマルタは心から信じてこう答えた。「主よ、信じます。あなたがこの世にきたるべきキリスト、神の御子であると信じております。(ヨハネ11:27)

マルタに劣らぬ強い証を持ったマリヤは、ふたりに出会って兄弟の死を悲しんで泣いた。イエスも泣かれた。

そこでイエスは、ラザロの墓を封じていた石を、ころがすように命じられた。そして天父なる神に祈ってから、大声で叫んで言われた。「ラザロよ、出てきなさい。」すると、ラザロは埋葬されたときの姿のまま出てきた。(ヨハネ11:18-44)

マリヤとマルタの信仰は何と偉大であったことだろうか。この姉妹の心は最後の敵である死と地獄さえも足もとに踏みつけ、すべての敵を克服したもう救い主に対する愛と敬慕の念であふれるほどであった。



たくさんの資産
を持っていた

青年

良い特質を数多く備えたある男の人が、イエスが近くに來たことを知って、走ってやってくると、救い主の足もとにひざまずいた。そのような行為は誠意のこもった心と勇気のある人でなければできないことであつた。この人は自分が知っている限り、律法に厳密に沿った生活をしていたと思われる。彼はきっぱりこう答えている。「それらの事はみな、小さい時から守っています。」

何もかもそろっていて調子よく見えた。しかしこの純潔を守り、裕福で敬虔な青年にも欠けるものがあつた。それは何の差控えもないイエス・キリストへの献身であつた。

イエスは言われた。「あなたに足りないことが一つある。帰って、持っているものをみんな売り払って、貧しい人々に施しなさい。……そして、わたしに従ってきなさい。」

彼は欠けるところがあつたので、すべてのことを犠牲にして救い主についていくことはできなかった。青年は悲しみながら立

ち去つた。

この青年はイエスの言うとおりでであると感じたが、この世の所有物に対する執着を断ち切ることができなかった。心はふたつの価値感の間で引き裂かれんばかりであつた。確かに善良な人物であつたが、彼の心はなお、神のことよりもこの世のことの上にとどまっていた。

救い主は、全霊をこめて一心に神の栄光を求めることと、完全に従順になるために妨げとなるものはすべて喜んで犠牲にすることを求めたもう。そこで質問をもってたずねてきた資産のある青年は、永遠の生命の代価を支払うことができずに立ち去つた。この青年にとって、この世はあまりにも未練が大きかったのである。(マルコ10:17-27, マタイ19:16-30)

イエスを人類の救い主と認めながら、少しの惜しむ心もなく仕える堅忍の徳に欠けたため、深刻な霊の苦しみを経験したキリストの弟子がほかにも一体何人いたのだろうか。

マルコと呼ばれていた

ヨハネ

マルコの母、マリヤは恵まれた環境の中に住んでいた。エルサレムにあったマリヤの家は、聖徒たちの集会所となっており、恐らくこの家でイエスと弟子たちは最後の晩餐を食したものと思われる。(使徒12:12-17) またペンテコステに関連して起こった感動的な場面も、一部この家で起こったのであろう。(使徒1:13)

マルコはきっと、家族を通してキリストのことを知ることになったに違いない。イエスが捕えられたとき、その場に布をまとった若者がいたが、この若者はマルコであるとする学者がいる。(マルコ14:51, 52)

パウロとバルナバが聖霊のささやきによって伝道の召しを受けたとき、ふたりは信仰と熱意にあふれる若者、マルコと呼ばれていたヨハネを連れて行った。(使徒12:25) ペルガで何か理由があってマルコと呼ばれていたヨハネは、エルサレムに引き返している。

(使徒13:13) このことに対してパウロは、マルコが帰らなければならない理由は何もなかったと感じていた。パウロはこのとき、マルコを激しく非難している。それで2回目の旅行のときには、マルコを同行させていない。(使徒15:37-41) そこでパウロは代りに

シラスを連れて旅立ち、マルコはバルナバとクプロへ向かっている。

次にマルコのことを記されているのは、ペテロと同行した時のことである。このときは以前に比べてはるかに成熟した大人になっていた。今やマルコは、献身的かつ忠実な、雄々しい聖徒であった。ペテロとマルコの間には非常に深い愛情と信頼が見られたのでペテロはこう書いている。「バビロンにある教会、ならびに、わたしの子マルコから、あなたがたによろしく。」

(Ⅰペテロ5:13) マルコは立派な聖徒であることを十分証明したので、献身的な同僚および書記としてペテロに同行することができたのであった。ペテロとそういう間柄にあったので、今日マルコによる福音書として知られている歴史を書き記すことができたのである。

またマルコは後にパウロから見直されているようである。それはパウロがコロサイ人に宛てて書いた手紙に、マルコを迎えてやるように記していることからくみとれる。もしこれが同じマルコであるとすれば、パウロは、マルコの以前の振舞いを反動的なものと考えていないことを知らせたかったようである。マルコは、自分の働きによってそれを証明したのである。

パウロは、殉教を前にして最後の手紙を書いたが、その中で非常に感動的な言葉を残している。「マルコを連れて、一緒にきなさい。彼はわたしの務のために役に立つから。」(Ⅱテモテ4:11)

パウロは、孤独な獄房に入れられて処刑を待つ間、マルコを呼んでそばにおらせた。このマルコは前にパウロを失望させたが、それ以来行動によって志気と信仰を表わしたのであった。

イスカリオテの

ユダ

ユダの文字通りの意味は、「神がたええられるように」ということである。しかし、この人の裏切り行為のため、ユダという名前は背信行為と不忠実の代名詞となっている。

ユダはユダヤ南部のケリオテ出身で十二使徒の中ではただひとりガリラヤ以外の出であった。イエスと共に3年起居を共にしたユダは、なぜあの2階の部屋で主から足を洗っていただいたあと、部屋を出て、ひとりの奴隷の値段でしかない価で主を裏切ったのだろうか。彼は主の教えを聞いていなかったのだろうか。主の祈りを聞いていなかったのだろうか。奇跡が行なわれた現場にいなかったのだろうか。他の弟子たちと神の王国について説いていたのではなかったのだろうか。

恐らく主に対する背信は、突然起こったものではないであろう。日に日に少しずつ積み重なって起こったものに違いない。

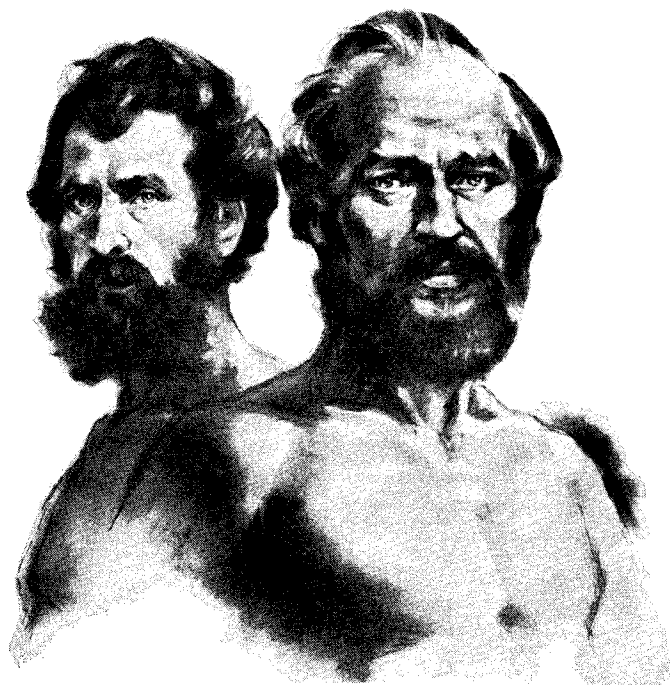
他の使徒たちは、ユダを疑っていなかったように思われる。彼が十二使徒の会計に選ばれたことからわかるように、皆ユダを信頼していたようである。階上の部屋でイエスが、「あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ろうとしている」と言われると、皆異口同音に「主よ、まさか、わたしではないでしょう」と言った。しかしイエスは知っておられた。イエスはいつ敵意がユダの心に入り込んだかを知っておられた。(マタイ26:17-25)

イエスが愛しておられたヨハネは、そのときのことを思い起こして、こう



記している。「……盗人であり、財布を預かっていて、その中身をごまかしていたからであった。」(ヨハネ12:6) このように言うからには、何か証拠があったに違いない。しかしそれもあとでわかったことであった。

イスカリオテのユダにも自由意志があった。ユダは救い主に頼ることを捨て、自分で生きていく道を選んだ。すると「サタンがユダにはいった。」(ヨハネ13:27) ユダのうちにともっていた霊的などもし火を消し去ったのは、実は誤った価値感のせいでもなければ30枚の銀貨に目がくらんだためでもなかった。それは純粋な悔いる精神をもって主に立ち帰らなかったためであった。ユダは救い主に赦す機会を与えなかった。聖典は次のように記している。「ユダは一きれの食物を受けると、すぐに出て行った。時は夜であった。」(ヨハネ13:30) ユダにとってそれ以来すべての日が夜となったのである。



ふたりの犯罪人

イエスはひとりで十字架にかかったのではなかった。カルバリの丘には3本の十字架が立っていた。イエスとその両側にかけられたふたりの犯罪人の計3人であった。これは対照的な取り合わせで研究の価値がある。

群衆が嘲り、役人が愚弄し、あるいは兵士がくじを引いたりする中で、パリサイ人は笑って言った。「彼は他人を救った。もし彼が神のキリスト、選ばれた者であるなら、自分自身を救うがよい。」犯罪人のひとりもイエスに悪口を言った。「あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ。」

しかしもうひとりの犯罪人がそれをたしなめて言った。「『おまえは同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか。お互は自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ。しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない。』

そして言った。『イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください。』

イエスは言われた。『よく言うておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう。』」（ルカ23：34—43）

初めのひとり、神の国などというものには全く興味を示さなかった。彼がイエスにかけた言葉は、神はもちろん、悔改め、赦し、正義などについて全く関心のないことを示していた。この犯罪人の被っていた

苦しみは、今いる場所が与える筆舌を越えた苦痛であって、自分の罪業を思っただけでなかった。彼は人生なんかまやかしか物だと決めつけて、自暴自棄に走ったのであった。このような人は、悔い改めて赦され、人を変える神の力を受けるよりは人生を憎々しげに眺める方を取るものであった。十字架の刑が迫ると、ますます毒々しさを増す一方で、さからうばかりであった。

ところがもうひとりの男は、イエスが本当はどんな人であるか少しわかってきた。そして人生で最も大切なものが何であるかをかいま見ることができた。自分が誤りを犯したこと、責められるのはほかでもない己れであることを知っていた。自分の悪事を認めたこの男は、神の正義と慈愛を理解することができた。この人の苦痛は十字架にかかっていることからくる肉体的なものに加えて、自分の過去に対する悔恨の念からくるものであった。この苦悩を味わって心から悔い改めたので、イエスから次のような約束を受けた。「あなたはきょう、わたしと一緒に、パラダイスにいるであろう。」

十字架にかかって苦しんでいたふたりの男がふたつの道を選んだ。ひとりの選択はますます毒気を帯びた強暴性と悲嘆に誘うものであった。他方もうひとりの選択は、赦しを得、来世で良い生活に入る可能性を持ったものであった。

マグダラのマリヤ

マグダラのマリヤは、救い主の無二の弟子となった。マリヤは、いつもイエスの身のまわりにいた少人数の弟子の仲間に加わり、自分の持ち物を捧げて奉仕した。（マルコ16：9、ルカ8：1—3）

イエスが十字架にかかって、弟子たちにそばにいて欲しいと思われたとき、マリヤは他の女たちと一緒に主のために仕えた。

（マルコ15：40、41）主の体を墓に葬ったときもそこにいた。（マルコ15：47）

あの週の初めの日、マリヤは朝早く墓へ出かけて、イエスの体に油を塗り、十分包み直して、悲しみのときを過ごそうとした。

（マルコ16：1）ところが石が転がしてあって、墓があいていたので、すぐに町へもどってペテロとヨハネに、イエスの体を取り去られていることを知らせた。（ヨハネ20：1、2）そして墓へと急ぐふたりの使徒のあとをついて行った。使徒たちが気を落として立ち去った後、マリヤはそこを去ることができず、泣いていた。

するとある人から声をかけられた。「女よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」マリヤは、その人が園の番人だと思っていた。

そこで言った。「もしあなたが、あのかたを移したのであれば、どこへ置いたのか、どうぞおっしゃって下さい。わたしがそのかたを引き取ります。」

イエスは彼女に「マリヤよ」と言われた。それでマリヤはその人がイエスであることを知った。

マリヤはふり返って、イエスにむかって「ラボニ」と言った、それは、先生という意味である。

イエスは彼女に言われた、「わたしにさわってはいけない。わたしは、まだ父のもとに上っていないのだから。ただ、わたしの兄弟たちの所に行って、『わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられる



かたのみもとへ上って行く』と、彼らに伝えなさい。」(ヨハネ20:14-17)

十字架にかけられた主、ナザレのイエスが死からよみがえった事実を、地上の人間の中でマリヤが一番最初に知ったことは、いかにも順当なことではないだろうか。

4つの聖典には

それぞれ

背後に興味ある歴史が

隠されており

人の子らに対する

天父なる神の愛が

よく表わされている

聖典の 神聖な 起源

ジェームズ・R・クラーク
ブリガム・ヤング大学
古代聖典学教授

天 父なる神は、子供たち—全人類—を愛しておられる。そして時の初めから愛してこられた。賢明で理解ある天父は、口頭で人に与えた勧告、忠告が容易に忘れ去られたり、失われたりし、従って人々が甚しく苦しむことになることを承知しておられた。

従ってこの地上に人が一番最初に現われるようになって以来、神は御自身の指示や導きを書き記して、人々の間に広く行きわたらせ、自由に入手でき

るようにするよう予言者に奨励し、命じてこられた。

末日聖徒イエス・キリスト教会の4つの標準聖典は、今日の神権時代に予言者に与えられた新しい啓示を含むと同時に、多くの古代の書物を包含している。

この4つの標準聖典は、聖書、モルモン経、高価なる真珠そして教義と聖約である。

どれを取っても皆背後に非常に興味のある歴史が隠されている。この神権時代に私たちが、恵まれて上記の4冊の聖典を得るに至った経緯そのものが私たちに対する天父の愛を如実に示している。

宣教師は、イエス・キリストの福音を全人類に宣べ伝えるとき、今日に伝わっている旧約聖書と新約聖書を大胆に用いている。それは福音がキリストの時代の前後を問わず、古代にも教えられていたことを承知しているからである。宣教師はこう宣言する。

「末日聖徒にとって、イエスはキリストであり、唯一人の御子、神の子、神会の一員である。私たちの近代の聖典は皆この点を証する書物である。真実の古代の聖典にこの永遠の真理を取り去ることも、そこなうこともない。」(J・ルーベン・クラーク・ジュニア「私たちの聖書」〔ブッククラフト社1954年〕〔英文〕P. 26)

神 が「すべての人の最初なる者」アダム(モーセ1:34)やその子アベル、セツ、孫のイノスに与えたもうた教えに関して、当時の予言者エノクは次のように書いている。

「それより、これらの者たち主の御名を呼ぶことを始めたれば、主彼らを

祝福したまえり。

ここに一部の覚えの書誌さる、その中に誌すところはアダムの言葉にてなり。そは靈感の『みたま』によりて書き誌すために、神を呼び求めたる者にみな与えられたればなり。

この者たちによりて、その子供たちは読書きを教えられ、その言葉は清くして汚れなかりき。」(モーセ6:4—6)

エノクの完全な記録は、将来回復されるが(教義と聖約107:57参照)、1830年12月にジョセフ・スミスを通して回復されたエノクの文や予言の抜粋に、エノクの当時の標準聖典に対する次のような見解が載っている。

「而して、死われらの先祖に來りたるにもかかわらず、われらはわれらの先祖を知りてこれを否むを得ず、すなわちわれらの知る最初の先祖アダムをわれら知るなり。

そは、神の指もて教えられたる手本に従い、われらの中に覚えの書を誌し來れり。而してこれに載するはわれらの用うる言葉なり。」(モーセ6:45, 46)

ア ブラハムの生涯とその時代について、ひとつの物語がモーセの第一の書、すなわち創世記に記されている。ジョセフ・スミスが啓示のみたまによって訳出した、アブラハムの自伝の翻訳に、当時の標準聖典のことが記されている。アブラハムはこう書いている。

「されど、われは今後われ自らよりさかのぼりて創世の前に至る年代記を描かんと努むべし。そはわれがその記録を手に入れし故にして、今に至るまでこれを所有せり。」(アブラハム1:

28)

紀元前2千年にアブラハムは、書き記された聖典を収集していた。これを標準聖典と呼ぶことができよう。そればかりかアブラハムは仮に要約した形になろうとも、それらの聖典を保存し子孫に伝える必要があることを洞察していた。アブラハムは次のように書いている。

「されど、神権の権能に関する先祖すなわち族長らの記録は、主なるわが神わが手の中に守り置きたまいぬ。……されば、わが後に来るべき子孫のため、この記録にある若干かのことを努めてここに誌すべし。」(アブラハム1:31)

近 代の啓示は、モーセの時代の記録の様式と書き記された聖典に対して新しい洞察を与えている。イスラエルがかたくなで、不義を好んだため(教義と聖約84:19-27参照)モーセが「あかしの板二枚、すなわち神が指をもって書かれた石の板」(出エジプト31:18)を砕いた後、神はモーセに言われた。

「あなたは前のような石の板二枚を切って造りなさい。わたしはあなたが砕いた初めの板にあった言葉を、その板に書くであろう。しかしそれは初めの言葉とは異なる。わたしが彼らのうちから神権を取りあげるからである。それゆえわたしの聖なる神権もその儀式も、もはや彼らの前を進み行かないであろう。……」(靈感訳出エジプト34:1)

「さきにおまえが砕いた二枚の板に書いてあった言葉を、わたしはその板に書きしるそう。……ただし聖なる神権の永遠の誓約の言葉は書きしるさな

い。おまえはそれをその箱におさめなければならない。」(靈感訳申命10:2)

このように、現在「教義と聖約」と「高価なる真珠」に編集されている。ジョセフ・スミスに与えられた啓示は旧約聖書の起源について新たな洞察を与えてくれる。

新約聖書の起源についてルカは次のように記している。

「わたしたちの間に成就された出来事を、最初から親しく見た人々であって、御言に仕えた人々が伝えたとおり物語に書き連ねようと、多くの人が手を着けましたが、……わたしもすべての事を初めから詳しく調べていますので、ここに、それを順序正しく書きつづって、閣下に献じることになりました。」(ルカ1:1-3)

ヨハネは、恐らく最後に新約聖書に聖典として編入されたと思われるヨハネによる福音書の中で、次のように証している。

「これらの事についてあかしをし、またこれらの事を書いたのは、この弟子である。そして彼のあかしが真実であることを、わたしたちは知っている。

イエスのなさったことは、このほかにまだ数多くある。もしいちいち書きつけるならば、世界もその書かれた文書を収めきれないであろうと思う。」

(ヨハネ21:24, 25)

教 義と聖約は、ヨハネに関する啓示を載せている。それはジョセフ・スミスが1829年4月に受けた啓示である。彼は、ウリムとトミムを使ってこの啓示を受けたと述べている。またヨハネが羊皮紙上に記して自ら隠した記録の訳文であることを明らかにしている。(教義と聖約7章、前文参照)

大きな4つの文字はヘブル語のアルファベットで、中央のさし絵は、アブラハムの書の写し第2。

右の文字はその上にあった石板の刻文である。



この回復された本文は、キリストが栄光の中に来られるまでヨハネが生き残るというヨハネ21:22, 23の聖句に光を与え、深みを加えている。

また1832年2月に「聖ヨハネの福音を翻訳」していて、ジョセフ・スミスは、聖書の伝承が極めて不完全であるという確信をますます深め、日誌に次のように記している。

「与えられた様々な啓示から、人の救いに関係する数多くの重要な教義が聖書の編纂される前に取り除かれたか紛失したかしていることが明らかであ

金版から翻訳したモルモン経の
オリジナルコピー。

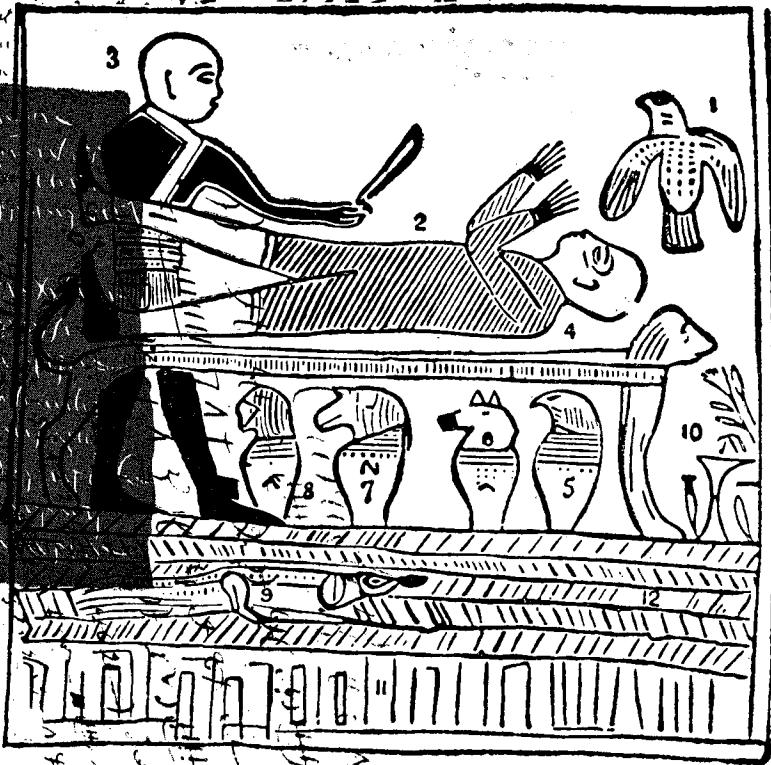
る。」(教会歴史記録「〔DHC〕第1巻
〔英文〕 P. 245)

続いて彼が受けたひとつの示現を記
 録している。そして、「その文書は、
 永遠の世界の記録から写したもの」で
 あると証している。〔「DHC」第1巻
 P. 252〕ジョセフ・スミスのおいの子
 であるジョセフ・フィールディング・
 スミス大管長は、ヨハネ 5：25-29が
 この示現を見るきっかけになった聖句
 であると言っている。〔「教会の歴史と
 近代の啓示」〔1953年〕第1巻〔英文〕
 P. 280〕

この教会が所有し、世に発表している近代の啓示は、新約聖書の起源に新しい洞察を与えている。

この教会が採用し、使用している扉の2の聖典は、モルモン経である。扉のページにこの書の神聖な起源が、簡潔に記してある。そしてこの書は、モルモンが主として、「ニーファイの民の記録から書き記した記録」であると述べている。またこの記録は、ふたつの民すなわちニーファイの民とジェレドの民の記録を要約したものであることも記している。またさらに、この記録の翻訳が「神の賜物」によって行なわれること、「イスラエル一家の残りの子孫に、その先祖のために主が為したもうた大きな御業をことごとく示」すために書かれたこと、また「ユダヤ人と異邦人とにイエスが永遠の神なるキリストにましまして、万国の民に現われたもうことを確信させる」ために書かれたことを宣言している。

神はわけへだてなく人類を愛し、思
いやりを抱きたもうことを、繰り返し
明らかにしておられる。知恵と愛に満
ちたもう神は、すべての神の子らが、



アブラハムの書の写し、第1。
偶像崇拝の祭司がアブラハムを
犠牲に供えようとしている。

ジョセフ・スミスが、モルモン經
の金版から取った文字の写し。

神の勧めを文書にして保存するように求められた。モルモン経に登場するある予言者は、人類に対する神の普遍的な愛について、次のような主の言葉を記録している。

「国民は一つより多くあるを知らずや。汝らの神にして主なるわれが万人を造りしを知らずや。またわれが海の島々に住む者のことを忘れざるを知らずや。またわれが上は天に於て支配し、下は地に於て支配し、わが言葉を世界万国の人々に示すことを知らざるか。」

「われがこのようにするわけは、われは昨日も今日もいつまでも同じ」であることを「多くの人々に証明せんとするためなり。」

「われは東西南北および海の島々にある一切の人々に、われがそれらの人々に語る言葉を書き記せと言う。そはわれはその書き記さる諸々の書に従い、その中に記さるることによりてあらゆる人をその為したる行ないに応じて裁判せんと思はばなり。」(Ⅱニーファイ29：7，9，11)

高 価なる真珠は、アダムからジョセフ・スミスの時代に至る、イエス・キリストの福音のすべての主要な神権時代に起源を持つ聖典を載せている。

この聖典は最初、1851年に英国で、十二使徒のフランクリン・D・リチャーズ長老がパンフレットの体裁で発行している。リチャーズ長老は、これを発行する第一の目的は、「予言者ジョセフ・スミスの神聖な使命を信じる真実の信者に、高価なる真珠のように貴重な真理をまとめて提供し、聖なる信仰を維持し、また弁護できるようにす

る」ことであると述べている。

リチャーズ長老はさらに続けて、「このジョセフ・スミスの啓示、翻訳、物語の選り抜きの選集」は、「ただ暗示しているだけであるが、あるいは全く触れていなくても、数多くの事実を含んでおり、注意深く聖典を吟味するすべての人の手に進んで身を委ねることであろう」と言っている。(1851年版の序文と表題のページ)

第2の版は、1878年にオルソン・ブラットが同じ題で、ほんの僅か編集に変更を加えて発行している。この第2の編集は、後に吟味され、大管長会が任命した委員会の下に十二使徒評議員会のジェームズ・E・タルメージ長老が内容を校訂している。この校訂は、大管長会から承認され、1902年10月の半期総大会で挙手により支持された。

教義と聖約は、この神権時代の3人の近代の予言者——ジョセフ・スミスブリガム・ヤング、そしてウィルフォード・ウッドラフを通して神から与えられた啓示と教えを載せている。

この神の指示を集め始めたのは、1831年にさかのぼる。この啓示の一部は1832年にミズーリ州インディペンデンスで、当時教会の公的な定期刊行物であった「イブニング・アンド・モーニング・スター」に初めて印刷された。その後啓示を集めたものが、1833年にミズーリ州インディペンデンスで「誠命の書」と題してペーパーバックで出版された。そして特別な委員会によって選択された、ジョセフ・スミスの啓示を載せた教義と聖約の初版は、1835年にオハイオ州カートランドで出版された。さらに後の版になって、他の啓示が追加された。

はしがきは、1831年11月1日、長老たちの特別な大会が開かれているときに、啓示によって与えられた。

その一部を掲げると次のとおりである。

「聴け、汝らわが教会の人々よ。いと高きところに住みて、すべての人を見まもる者の声は告ぐ。曰く、誠にわれ告ぐ、汝ら民よ、遙かなる所より耳を傾けよ。海の島々にある者よ、共に聴け。

誠に主の声はすべての人々に及ぶものなれば……

この故に、主の声は耳ありて聞かんとするすべての人々に聞かれんため地

の果にまで及ぶ。

完全なるわが福音、弱き者たち単純なる者たちによりて世界のいやはてまでも宣べられ、また王と統治者との前に宣べられんがためなり。」(教義と聖約1：1，2，11，23)

上の聖句で教義と聖約について言われていることは、実にすべての標準聖典についても言える。なぜなら標準聖典の中に完全な福音が載せられているからである。「あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである。」(ヨハネ5：39)

ヘブル語訳のモルモン経、第Ⅱニーファイ5章から

ハロルド・B・リー大管長

しばらくの間ソルトレーク市からある噂が流れてきたが、真偽のほどを確かめるのはむずかしかった。ついに「センクレー」とサインのある電文で公式の声明が出された。その声明はただちにイスラエルの教会員に伝わった。「リー大管長が確かに来られる。予言者がこの聖地に来られる。」そしてあの日、私たちは空港のVIP（最重要人物）ルームで、観光局、外務局、宗教局の代表者と共に予言者を待ち構えた。国中から集まった30人足らずの末日聖徒と共に、夫人同伴のハロルド・B・リー大管長、ゴードン・B・ヒンクレー長老、スイス伝道部長エドウィン・Q・キャノン・ジュニア長老を迎えることは、ひかえめに言っても胸の高なる経験だった。

リー大管長は短い旅行の間に救い主の足跡をたどって、数カ国を訪ね、数々の大会に出席して来られたあとだった。大管長とキャノン姉妹がアテネでの会合に招かれ、その他の人たちは付添いとして招待されていた。（スイス伝道部が中東の各支部を管理する責任を持つ。）

私はグループリーダーのデビッド・B・ガルブレイスを初めとする仲間たちと同じように前にリー大管長にお会いしていたが、このたびの旅行はそれ

ジョン・A・トベットネス

リー 大管長 との交流



と違っていた。なぜなら大管長は主に油そそがれた者として来られたからである。1841年にオルソン・ハイドが訪れて以来多くの教会幹部が聖地を訪ね末日の教会指導者の幾人かが私たちと聖餐を共にした。しかし、教会の頭である主なる救い主がこの世の生涯を過ごされた地に、この神権時代の大管長が来るのは、このときが初めてだった。

公式のレセプションや紹介が息つく暇もなく続く中で、私は、この大騒ぎの張本人であるリー長老の示す謙遜な心に、特に強い印象を受けた。彼は手を差し出しながら飾り気なく「こんにちは。私はリー兄弟です」と言われた。

「リー兄弟です」とは、簡単でありながら尊厳をも感じさせる肩書きではないだろうか。彼は大管長という肩書きを使わずに、自分の最も大切な務めすなわち神の霊の子、私たち全員の真実の兄弟という務めを表わす呼び名を選ばれた。忙しいときでも常に礼儀正しく妻を気づかう姿に、人々への敬意がいつも示されていた。ある食事の際に魚が出されたが、リー大管長は席を立ち、自分の食事がさめるのもかまわずに、妻の魚の骨をていねいに取っておられた。

イエスが生活し教えを施された場所を訪ねたとき、リー大管長もヒンクレー長老もしばしばすわって静かな想に耽けり、目に涙をたたえながら、自分を働きに召されたその御方の使命を黙考しておられた。リー大管長は何度か聖なる場所に殺倒する騒々しい観光客の行動をたしなめようとされた。

私たちはリー大管長が、堅い信念を持つと同時に人々の考えに耳を傾けようとする方であることを知った。ガル

ブレイス兄弟が大管長とリー姉妹とヒンクレー長老夫妻の車を運転しながら道中の興味ある事物をいろいろ説明したが、あるときリー姉妹が「あなた、これまで40分も黙っておいでですね」と言われた。すると大管長は「そうだよ。話すよりも聞いた方がたくさんのことを教えられるからね」と答えられた。

それは良い教訓だった。そして大管長はキリストの真の弟子として、それを言葉ではなく模範によって教えられたのだった。彼は多くの形で私たちに模範を示された。ある晩、忙しい長い1日を終えて、リー大管長は疲れのためなかなか眠れなかった。彼はヒンクレー長老とキャノン伝道部長を呼んで祝福を施してもらい、十分に体を休めた。ここに確かに、真実あるがままの神権、日曜の朝までただ隠しておくのではなく、行使するようにと神から与えられた祝福である神権を持った人がいる。

私たち教会員にとって最も印象的だったのは、9月20日、エルサレムの園の墓で、管理の権能を持つ3人の兄弟たちを迎えて開いた集会だった。主のよみがえりの聖所で話された、イエスを信じる彼らの強い証は、私たちの心に善を行なおうという堅い決意をかきたてた。それが予言者のひとつの大切な責任であり、私たちはそのことによってさらに、ハロルド・B・リーがその肩書きにふさわしいことを証できる。

このときキャノン伝道部長が支持をとり、少数の聖徒たちでエルサレム支部が正式に組織された。ガルブレイス兄弟がリー大管長によって支部長に任

命され、ヒンクレー長老が私を第一副支部長に任命した。私はこれまで教会にあって神権により数多くの祝福を受けてきたが、このときほどみたまに満たされたことはなかった。主から啓示されなければわかるはずのない言葉がヒンクレー長老の口から出、続いてその祝福のときに与えられた約束がふたつ成就したことは、聖霊が教会指導者を導いていることの重なる証拠だ。

私は召しの支持がとられるときの指導者の兄弟たちの様子を知りたいと思っていたので、リー大管長の席の方を見た。教会の大会で会衆のひとりとして自分の手を挙げ、主の予言者を支持したことは何回もある。しかし予言者が手を挙げて私を支持するのをこの目で見るのは初めてだった。それは決して忘れられない経験だ。この経験が私の記憶の底に深く止まり、主から求められていることを行なうのにためらいを覚えるようなときには自分の責任を思い起こさせてくれるに違いない。

神の選ばれた代弁者と、その側近との前で過ごした貴重な何時間かの間に私の感じたことは、とても言葉では言い表わせない。しかし私は、神の予言者が訪問されたとき以外私たちと共にいる聖霊から、いくらかでも人々が恵みを得るように努めなくてはならないと感じている。私はこの文を読む人たちが皆、ハロルド・B・リー大管長の持たれる各教会員と全人類への愛と関心を知るようにと願う。その愛は、神と人類との仲保者としてふさわしい愛であり、神は、仲保者である彼を通して救いと昇栄に至る道を示されるのである。

「彼女が信じている宗教、
それが
今の彼女を作りあげたのだ」



ぼくじゃない

ほかのだれかと結婚したらいいんだ

私は何年前か、ある女性の集まりに招待されました。それは戦争のために家を離れている女性が悪い道に落ちないようにとの目的で組織されたものでした。彼女たちはほとんど地方の出身者でした。私が自分の責任を終えて帰ろうとしているとき、ひとりの女性が近寄ってきて少しの間話をしてくれようかと私に尋ねました。彼女は財布をあけて1枚の写真を取り出しました。それは陸軍の制服を着たハンサムな青年で、写真の下の方には愛についての言葉が何か書かれ、サインがありました。彼女は写真の裏から折りたたんだ紙を出しましたが、そうしながら目には涙があふれていました。それで私は「いったい、どういうことなのですか」と聞きました。彼女は答えました。「リー兄弟、私はこの近くの駐留地でこの人に会いました。彼は立派な青年で、清潔な良い習慣を持った人です。いつも私に礼儀正しく紳士的に接してくれます。彼とデートをするときは安心していられます。でもたったひとつ困ることがありました。彼は教会員ではなかったのです。しばらくして私は彼から結婚を申し込まれました。私は返事をしました。『ジャック、私はあなたを愛しています。でも私たちにはもっとほかに考えなくてはならないことがあるわ。私たちにとって結婚というのはこの人生だけのものではないの。それがもし純粋な愛ならば、いつも続いて、私たちは永遠の夫と妻になるはずだと思うわ』と。

最初は議論でしたが、彼は次第に感情的になり、しまいにはとうとう怒りを爆発させてしまいました。やがて彼に海外戦闘地勤務命令が来ました。このとき彼は婚約の問題で悩んでいたの、私ははっきり言いました。『私は主の宮居で結婚できる人とでなければだれとも結婚できないわ。』彼は怒って言いました。『いいよ、もし君がぼくよりも教会や宗教のことを大切に考えているなら、ぼくじゃないほかのだれか教会の人と結婚したらいいんだ』と。』

彼女は眠れずに泣き明かしたか、泣きながら寝てしまったかどちらかだろうと思います。そのどちらであるかは知りません。彼は3週間して、太平洋諸島で激しさを加えている戦闘の、部隊集合地となるオーストラリアに赴任しました。その旅の途中で、彼は、自分の生活の理想であるやさしく愛らしい彼女が言ったことをよく考えてみま

した。彼女は自分の恋人・妻・子供たちの母にこうあって欲しいと思うものをすべて備えていました。そのとき彼はこう考え始めました。「自分は厳しすぎたのではないだろうか。彼女がそのような女性なのは、きっと信じている宗教のせいなのだ。」

彼はそう考えて、オーストラリアに着くとそこにいる末日聖徒の男性と末日聖徒の従軍牧師を捜しました。彼は集会に出席し始めいろいろと質問するようになり、やがて彼女の誕生日にバプテスマを受けました。そして自分のバプテスマ証明書と写真を、誕生日のプレゼントとして彼女に贈りました。それに添えた手紙の中で彼はこう言うていました。「私は末日聖徒としていっしょうけんめいに生活しようと思う。家に帰ったら長老に聖任されるように。そして君を主の家に連れて行き、君が長い間願っていた永遠の結婚ができるように。」

「ではリーステーキ部長、
私は間違った所から答えを
得ていたに違い
ありません。」



ラジオの真空管

何年前か、私がステーキ部長として召されていたとき、高等評議員会とステーキ部長会に提訴しなくてはならない非常に悲しい事件が起き、結局、愛らしい娘さんを傷つけた男性が破門されたことがありました。その訴訟について夜通し評議員会が開かれ、翌朝私がかなり疲れて事務所に行くと、前日の晩審理にかけられた男性の兄弟だという人が待っていました。その人は言いました。「私の弟は、とがめだてを受けていることについて、罪を犯してはいないと言いたいのです。」

「彼が無罪だということは、どうしておわかりですか。」私は尋ねました。

「祈ったからです。主は弟が潔白だと私に教えて下さいました。」その人は答えました。

その人を事務所に通して、椅子に腰かけました。私は聞きました。「少し立ち入ったことをおうかがいしてもよろしいですか。」彼は「ええ、どうぞ」と答えました。

「お年はお幾つですか。」

「47歳です。」

「神権の職は？」彼は、教師だと思ふと言いました。「知恵の言葉は守っていらっしゃいますか。」「あの、守っていません。」彼がタバコを吸っていることは明らかでした。

「什分の一は納めていらっしゃいますか。」

彼は「いいえ」と言いました。そしてあの憎らしい男がワード部の監督をしているうちは払う気がないと言いました。

私は、「神権会に出席していらっしゃいますか」と尋ねました。

彼は「いいえ、ステーキ部長」と言いました。あの男が監督をしている間は行くつもりがないというのでした。

「では、聖餐会にも出席しておられますね？」

「はい、そうです。」

「家族の祈りはしていらっしゃいますか。」

「いいえ。」

「聖典の勉強はしていらっしゃいますか。」彼は、目が悪いのでたいして読めないと言いました。

それから私は彼に言いました。「私の家にはラジオというすばらしい器機があります。すべてが調子よく動けば特定の局にダイヤルを合わせて、アメリカ大陸全土や時には地球の裏側からも、まるで正面の部屋にいるかのように歌手や話し手の声を捕らえることができます。しかし長時間使っていると真空管という小さい鋭敏な電気装置が消耗し始めます。幾つかあるうちのひとつが古くなって駄目になると、一種の空電を起しますが、まだ表立っては現われません。ところがもうひとつ古くなっているのを気にとめないでいると、だれが一着になったかを聞き分けようとするときに声がふっと小さくなったりします。次にそれを修理しないでいてまた別のが駄目になると、ラジオは前と全く同じ状態でそこにありながら、内部に故障が起きて聞こえなくなります。歌も聞けなければ話も聞けません。」

「さて」と私は続けました。「あなたも私も、心の中に真空管に相当するものを持っています。『聖餐会に行く』真空管や『知恵の言葉を守る』真空

管や『什分の一を納める』真空管、『家族の祈りをする』真空管、『聖典を読む』真空管というようなものがあって、その中で最も大切な、心全体の主力真空管ともいうべきものが『自分を道徳的に清く保つ』真空管です。もしそのうちのひとつが、使用しないために駄目になったり動かなかったりしたら、すなわち私たちが神の戒めを守らなかったなら、家にあるラジオの真空管が駄目になって、聞こえるはずの遠くの声が聞こえなくなると同じことが、私たちの霊にも起こるのです。」

そして私は言いました。「ところでステーキ部の正しい生活をしている立派な神権者が15人で、昨晚祈りました。彼らは証言を聞き、全員一致であなたの御兄弟は有罪であると言いました。そこで、そのようなことを何もしておられないあなたが、祈って正反対の答えを得たとおっしゃいます。それはどうしてなのか聞かせて下さい。」

するとその男性は、私にはそのものずばりと思われる答えを言いました。

「ではリーステーキ部長、私は間違った所から答えを得ていたに違いありません。」それが私たちの持つ偉大な真理であることは御存知でしょう。私たちは自分の従う権力者から答えを得ます。もし悪魔の戒めに従うなら悪魔から答えを得、神の戒めを守るなら天父から答えを受けて導かれます。

質疑

応答



解答／ブラウン管理監督

「教会の責任を受けないことが正しいとされた場合がありますか。」

私たちは教会の責任を受けたいと望むのでもなければ、どの責任がよいか選ぶのでもありません。権能を持つ人々の靈感によって召されるのです。与えられた責任が自分にふさわしくないと考えることは珍しいことではありません。もちろん自分自身の力にたよるのであれば、ふさわしくはないでしょう。責任を与えられている人はすべて各自の責任を効果

的に行なえるよう、主のみたまをよく受けることが大切です。

神権役員から召しがあって、どうするかを考えると、私たちはリーハイがニーファイに、かたくなな兄弟たちとエルサレムに戻って真ちゅう版を持ってくるようにと言ったときのニーファイの言葉を思い出さなければなりません。明らかに困難な申し出にもかかわらず、ニーファイは主への信仰を示し、このように言いました。「私は主が命じたもうことを行って行く。私は、主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それではなくては、主は何の命令も人に下したまわらないことを承知しているからである。」(I ニーファイ 3 : 7)

2, 3年前、私はニューヨークで同じような信仰を目の当たりに見ました。仕事でニューヨークにいた私は、断食日曜日にやっとのことでマンハッタンワード部にたどりつきました。初めて訪れたワード部でしたが、会員たちに先だって証した若い監督の証ははっきりと覚えています。彼はコロンビア大学の学生で、博士課程をふんでいました。また妻や子供たちを養うために仕事も持っていました。彼は訴えるような口調で、監督の職を少なくとも学位を得るまで取り去らないように常に祈っていると語っていました。また祝福されて、成績もクラスの上位だということでした。この若い監督は、ニーファイのように、もし主に仕えているなら、どのような困難に遭っても、主はそれに立ち向かえる力を与えてくださることを知っていたのです。

この教会はイエス・キリストの教会です。イエス御自身が教会の頭なのです。責任ある者は皆、ひとつの目的のために召されています。それはすなわち、主の御業と栄光をもたらすために主に仕えるということです。これについて主は次のように言われました。「……人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」(モーセ 1 : 39) これ以上に偉大な機会と祝福があるでしょうか。これが、神権を通して与えられる召しはすべて受けるようにと教えられている理由なのです。

まれに、個人的な問題を知らずに召しを与える場合がありますが、そのようなときでも、その問題について召す人に説明すべきです。召す人が、その問題についてすべて知り、それでもなお私たちにその責任において働くように求めるならば、その要求に応じるのが私たちの義務だと思います。



作：ビビアン・バーソロミュー

絵：バージニア・サージェント

「あなたはどんなタレントを出すつもりなの」とスペンサー夫人がききました。

「わたし、ひとつもタレントがないの」とルーシーは答えました。

「だれでもタレントはあるわ」とスペンサー夫人が言いました。

「わたしにかくれているようなタレントなんてなにもないわ」とルーシーははっきり言いました。

「でもアレンの歌やマリリーのピアノ演奏をおばさんにも聞かせたいわ。

店へ向かって急いでいるとちゅう、ルーシーは玄関にいるモートンさんに会いました。

「こんにちは、モートンさん」とルーシーは声をかけました。

モートンさんはゆりいすを止めて、にっこりしながらあいさつしました。

「こんにちは、ルーシー。」

「もう石はみがかないの」とルーシーが聞きました。

「けさ、今まで見たこともないようなきれいなトルコ石をみがいたばかりなんだ」とモートンさんは顔をかがやかせながら言いました。

「スペンサーさんにたのまれた糸を買ってきてから石を見に来るわ」とルーシーはモートンさんにやくそくしま

「おかあさん！」ルーシーは本を置きながら息を切らして言いました。「来週、学校でタレントショーがあるのよ。エレンに知らせなきゃ。」

「エレンもよろこぶでしょうよ」とお母さんが言いました。

エレンの家に行くとちゅう、ルーシーはスペンサー夫人の家によってあいさつをしていくことにしました。

「まあ、よくきてくれたわね」とスペンサー夫人が言いました。

「なにかお手伝いすることありますか」とルーシーは年をとったスペンサー夫人にたずねました。

「お店で糸を買ってきてもらえるか

しら。エプロンのポケットをぬっていたら、糸がたりなくなってしまったの」とスペンサー夫人が言いました。

「どんなエプロンか見せていただけませんか」とルーシーはたのみました。

スペンサー夫人はエプロンを持ってきました。

「まあ、きれい」ルーシーはそう言ってひらひらしたひだでふちどりのポケットのある、きれいなオーガンジーのエプロンをほめました。「来週学校でタレントショーがあるのよ。もしおとなのためのショーだったら、おばさんもそのすてきなエプロンを出すことができるのに。」





した。

「わたしに何かお手伝いできること
ありませんか」とルーシーはたずねま
した。

「手紙を出してもらえればうれしい
んだが」とモートンさんが言いまし
た。

「とちゅうで出してあげるわ。」そう
言ってルーシーはモートンさんのたの
みをきいてあげました。

手紙を出してスペンサー^{ふじん}夫人の糸を
買ってから、ルーシーはモートンさん
のところによってみがかれたばかりの
石を見ました。

「うわー、きれい。」ルーシーは思わ
ず息をのみました。

「モートンさんは、世界中で一番き
れいな石をみがいているのね。」

モートンさんの目はかがやきまし
た。

「ルーシー、きみにほめられると一
番うれしいよ。」

「来週、学校でタレントショーがあ
るのよ」とルーシーはモートンさん
に話しました。「もしおとなもでられ
るのなら、モートンさんはその石を出
せるのに。」

「もちろんきみにもタレントがある
んだろう。ルーシー」とモートンさん
が聞きました。

ルーシーはわらって答えました「わ

たし、タレントなんて何もないのよ。」

「だれにでもタレントはあるさ」と
モートンさんが言いました。

「わたしにかくれているようなタレ
ントなんてなにもないのよ」とルー
シーははっきり言いました。「モート
ンさんも、そのショーでクレイグのロー
プの手品^{てじな}を見たりケンのドラムを聞い
たらいいわ。」

ルーシーはモートンさんにさような
らを言う^てとエレンの家へ急ぎました。

エレンのお母さんが玄関^{げんかん}に出て来ま
した。

「エレンにお会いできますか」とル
ーシーがたずねました。

エレンのお母さんは「ええ、もち
ろんよ」とほほえみながら言いました。

「エレンを公園に連れて行っても
いいですか」とルーシーが聞くと、「え
え、エレンも喜ぶわ」とお母さんが答
えました。「きょうは赤ちゃんがず
つと気げんがわるかったのでエレンを散
歩に出してあげられなかったの。エレ
ンは自分のへやにいるわ。」

「こんにちは」とルーシーはベッ
ドにねているエレンにあいさつしまし
た。「公園にいっしょにアヒルを見に
行かない?」

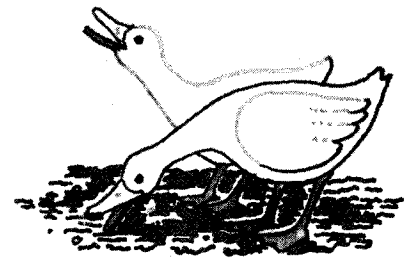
エレンの目はかがやきました。「つ
れてってくれる?」とエレンが言いま
した。

「そのために来たのよ」とルーシー
は答えました。そしてルーシーは車い
すをベッドのそばにおして行き、エレ
ンのお母さんがエレンをそこにすわ
らせる間、赤ちゃんをだいてあげま
した。

「アヒルにあげるパンがいるでしょ
う。」エレンのお母さんはそう言ってパ
ンをひとふくろわたしました。

公園に向かって車いすをおしながら
ルーシーはエレンに言いました。「来
週、学校で、タレントショーがあるの
よ。」

「あなたは何をするつもり?」とエ



レンがたずねました。

ルーシーはわらいながら「わたし、
タレントなんて何もないわ」と言いま
した。

「だれにでも何かとくいなものがあ
るはずよ」とエレンはまじめに言いま
した。

「たえひとつぐらいあったとして
も、それをのばす時間がないわ」とル
ーシーははっきり答えました。「あな
たもこれるといいわね。ジェナのバレ
ーやロジャーの詩の朗読^{ろうどく}があるのよ。」

「ええ、ぜひ行きたいわ」とエレン
が言いました。

ふたりでアヒルにえさをやり、エレ
ンがぶじに家に帰ってからルーシーが
言いました。「じゃ、あすの放課後の
タレントショーで会いましょうね。こ
のつぎ来るときはアヒルにやるパンを
わすれずに持って来るわ。」

つぎの日、ルーシーはディックス先
生が黒板をふくのを手伝ったので、タ



レントショーが開かれている体育館に少しおくれて入って行きました。ルーシーは一番うしろのジェイニー・アンダーソンのとなりの席にすわりました。

とてもすばらしいタレントショーでした。ロジャーのおもしろい詩の朗読やマリリーのじょうずなピアノ演奏、そしてクレイグのロープ手品はテレビで見るのと同じくらいじょうずでした。ジュナのバレエはとてもきれいだったので、ルーシーは自分もおどりたいと思ったほどでした。

ケンのドラムはかみനりのように体育館中にとどろきわたりました。またアレンの歌はとてもじょうずだったので、みんなアンコールをしました。このアンコールでタレントショーの出し物の部は終わろうとしていました。

するとバーゲス校長がステージに上がり、手をあげてみんなのはく手を静めました。

ルーシーは、校長先生がカフェテリアに美術工芸品がてんじされ、そこでおかしやジュースが出されるということを発表するのを待っていました。でもそうではありませんでした。バーゲス校長はみんなが静かになるとつぎのように話しました。「今までみんなが気づかなかったタレントをしょうかいしたい」と言います。」

みんなは耳をすましました。

「ルーシー・エバート、前に出てきて下さい」と校長先生が言いました。

ルーシーは目をまるくしました。

ジェイニーはルーシーをつついて言いました。「さあ行くのよ、ルーシーあなたのことよ。」

「なにかのまちがいだわ。」ルーシーはふるえる足で前に出て行きながら自分に言いかけました。

ルーシーがそばに立つと、バーゲス校長はつづけて言いました。「わたしたちはこれまで友情というタレントを見すごしにしてきました。このタレントが広まるには、みんなで実行しなくてはなりません。きょうは友情や人助けというルーシーのすばらしいタレントの証人として、ルーシーの友だちが

何人かみえています。」

前の列にいたモートンさん、スペンサー夫人、そしてエレンのお母さんがエレンの車いすをおして、前に出ました。

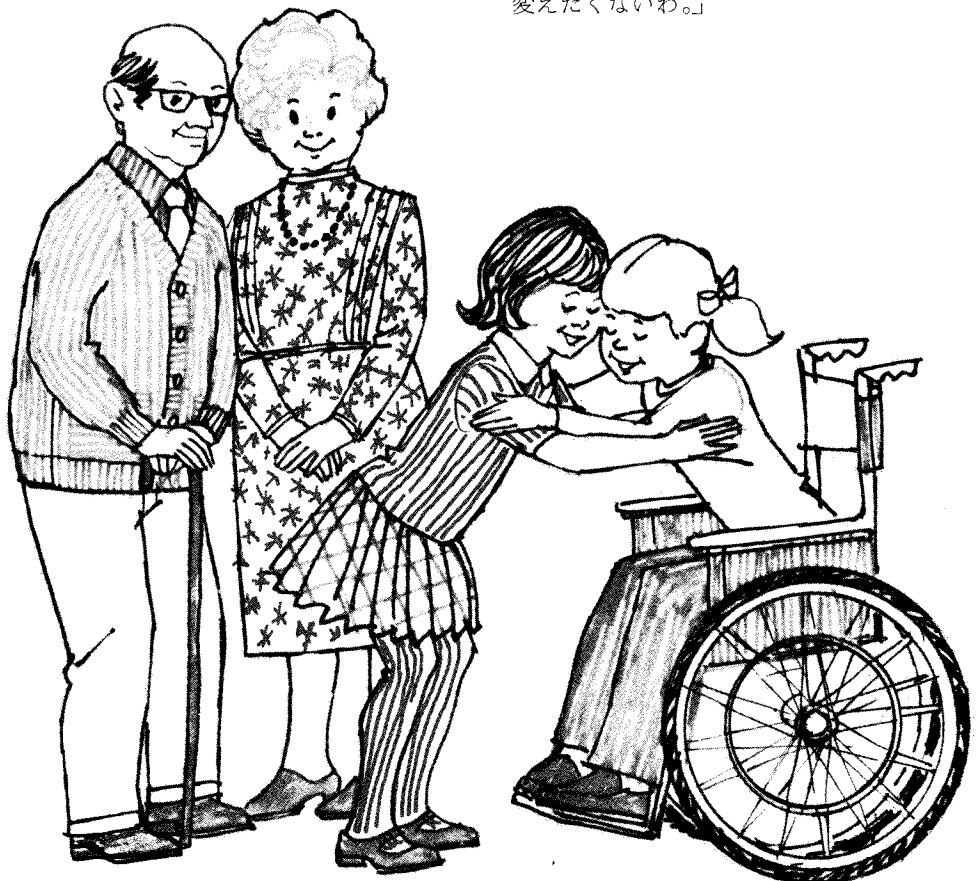
体育館いっぱいにはく手がわきあがりました。ルーシーの心は感謝でいっぱいでした。ルーシーはスペンサー夫人にだきついていきました。

「おじさんはわたしのすばらしいお友だちよ」とルーシーはモートンさんのところに行ってささやきました。

それからしあわせそうなエレンの手をとって言いました。「友だちを持つことがタレントだなんて思ってもみなかったわ。」

「特別なタレントよ」とエレンがささやきました。

「わたし、みんながだいすきよ。」ルーシーは自分の友だちの方を見て楽しそうにほほえみながら言いました。「わたし、自分のタレントをほかの何にも変えたくないわ。」



イスラエルの王、アハブはいましめにしたがわないうるい王さまでした。そこで主は、アハブをいさめるためによげんしゃエリヤをつかわしました。エリヤはアハブに「イスラエルの神主は生きておられます。わたしのことばのないうちは雨がふらないでしょう」と言いました。

これを聞いて王はおこりました。すると、主はエリヤに東の方へ行って川のほとりにかくれていなさいとおっしゃいました。主は言われました「その川の水をのみなさい。わたしはカラスにめいじて、あなたにたべものをもって行かせよう。」

エリヤは主にしたがいました。朝になるとカラスがパンとにくをはこんできました。夕がたになると、またカラスがパンとにくをはこんできました。そしてエリヤは水をのみました。

国中にききんがやってきました。雨もふらなければ、つゆもおりません。エリヤが水をのんでいた川も、だんだん水が少なくなり、とうとうかれてしまいました。

主はエリヤにちかくの町にある、やもめの家に行き、食物をもらいなさいと言われました。エリヤが町の門にやってくる、ひとりのやもめがたきぎをひろっていました。エリヤはそのやもめに、水とパンを少しくださいとたのみました。するとやもめは、「わたしの家には、かめにひとにぎりのこなと、びんに少しあぶらがあるだけです。わたしは、わたしとむすこのさいごの食事を作るためにたきぎをあつめているのです」とこたえました。

エリヤは言いました。「まず、わたしのために小さいパンをひとつ作ってもってきてください。その次にあなたとあなたのむすこの食物を作りなさい。主は地面に雨をふらせる日まで、かめのこなもびんのあぶらもなくなるとやくそくしておられます。

やもめはエリヤの言うとおりにしました。主のことばのとおり、かめのこなもびんのあぶらもなくならず、やもめの家族は何日も食事をすることができました。

しかし、少したつとやもめのむすこが病気になり、死んでしまいました。やもめはとてもかなしみました。

エリヤはやもめに言いました。「あなたのむすこをよこしなさい。」そしてエリヤはやもめのむすこをうでにだき、2かいの自分のへやに行き、とこにねかせて、主をよんで言いました。「わたしの神、主よ、この子供のれいをもとにかえしてください。」

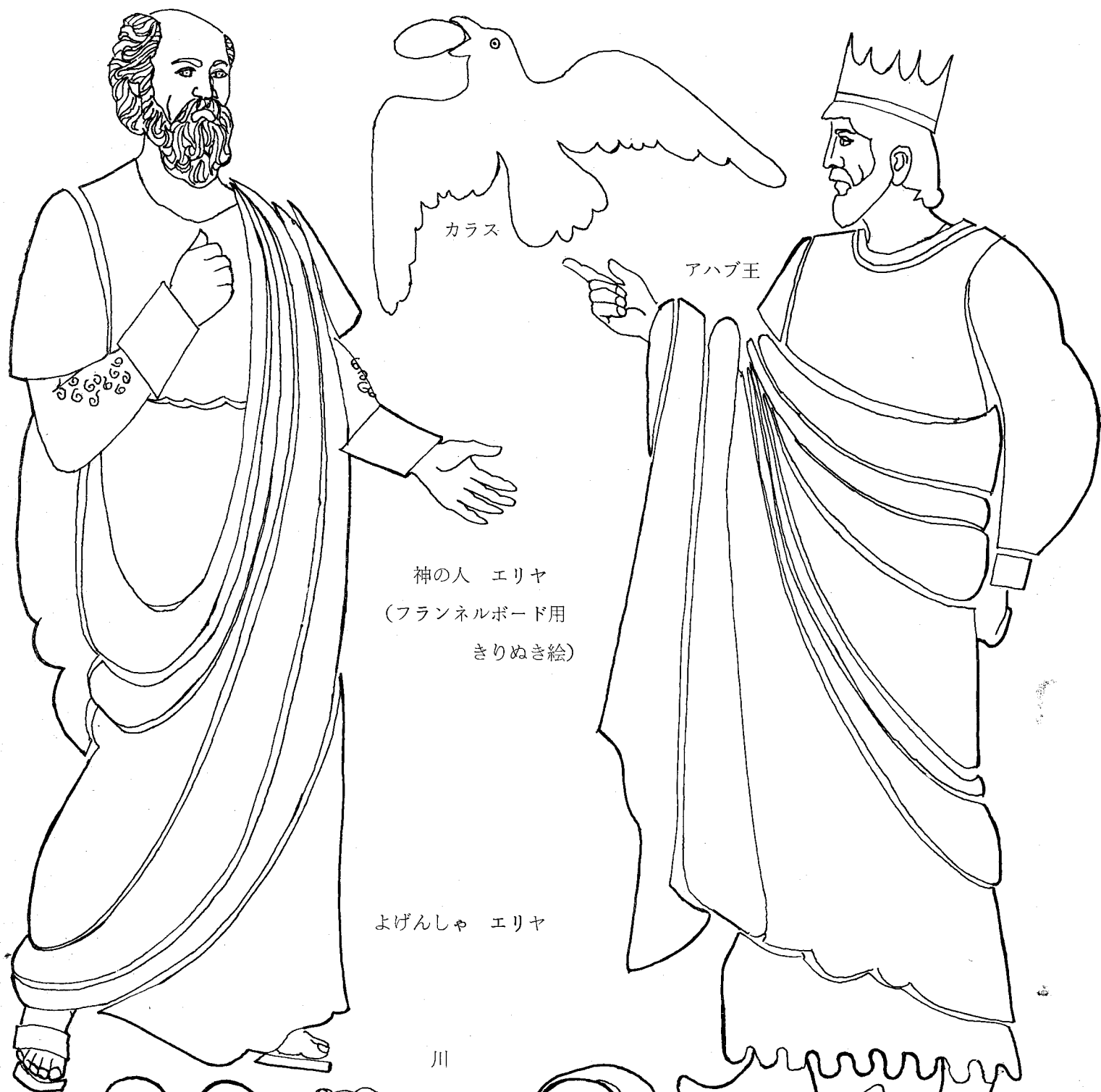
主はエリヤのいのりを聞き、子供は生きかえりました。エリヤは子供をつれて下へおり「ごらんなさい。あなたのむすこは生きかえりました」と言って母おやにかえしました。

やもめはよろこんでエリヤに言いました。「あなたはほんとうに神の人です。あなたの口から出る主のみことばはしんじつです。」

絵：ジェリー・ハーストン

きりぬきえのせつめい

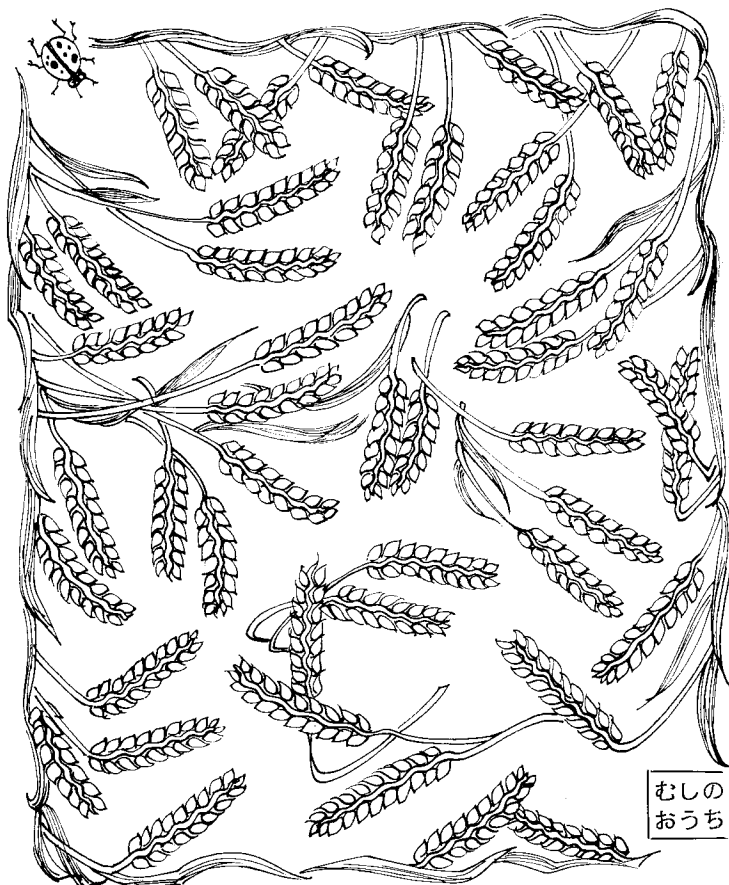
409ページと411ページにあるえをていねいにきりぬき、フランネルボードにはれるように、うらにフランネルをはります。そして、きりぬきをフランネルボードにはりながら、おはなしをします。



おもちゃはこ

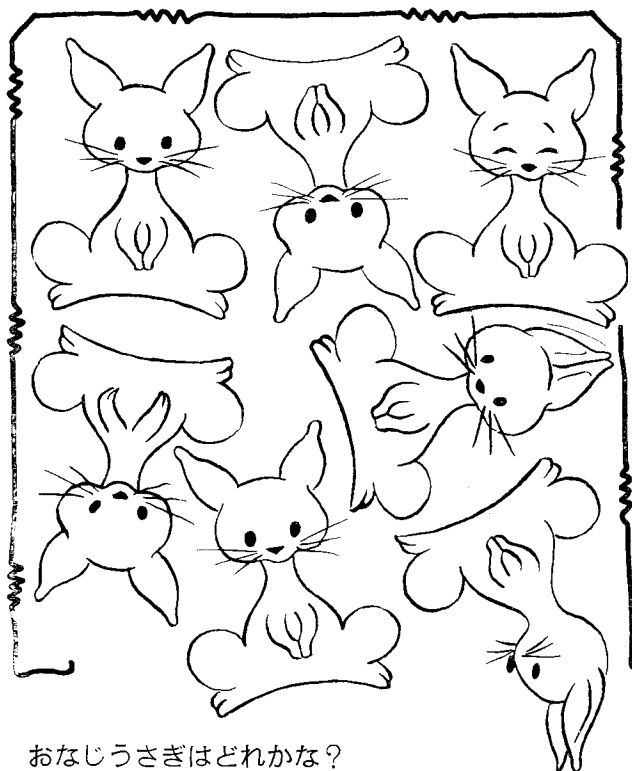
おうちまでつれていってあげましょう

アン・ステイシー



ぼうしさがし

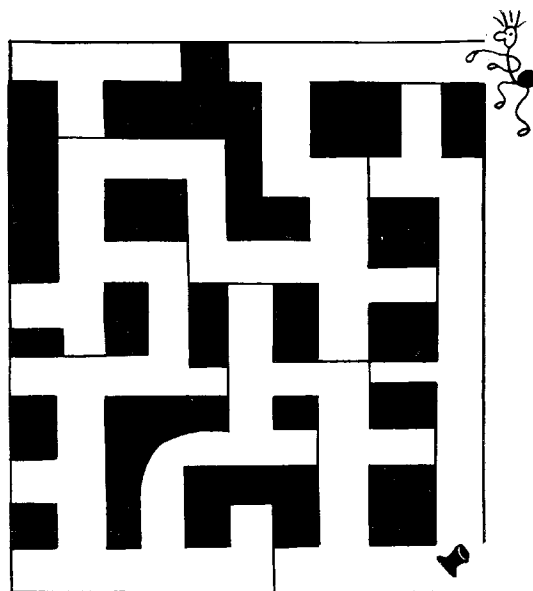
ありは、どのみちをいったら、ぼうしをみつけれ
るでしょう？

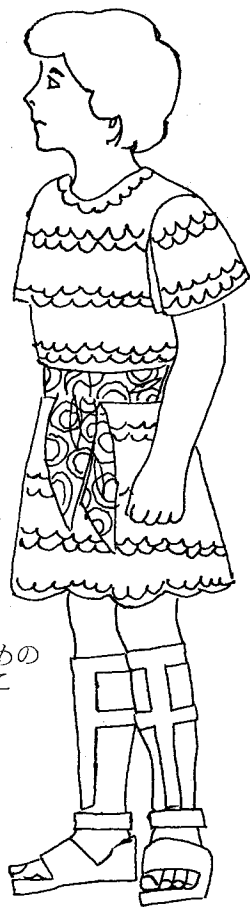


おなじうさぎはどれかな？

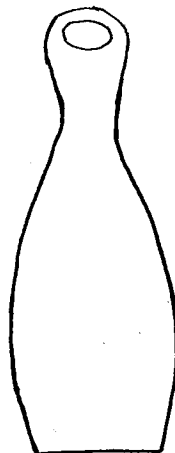
ウォルト・トラッグ

おなじうさぎにいろをぬりましょう。

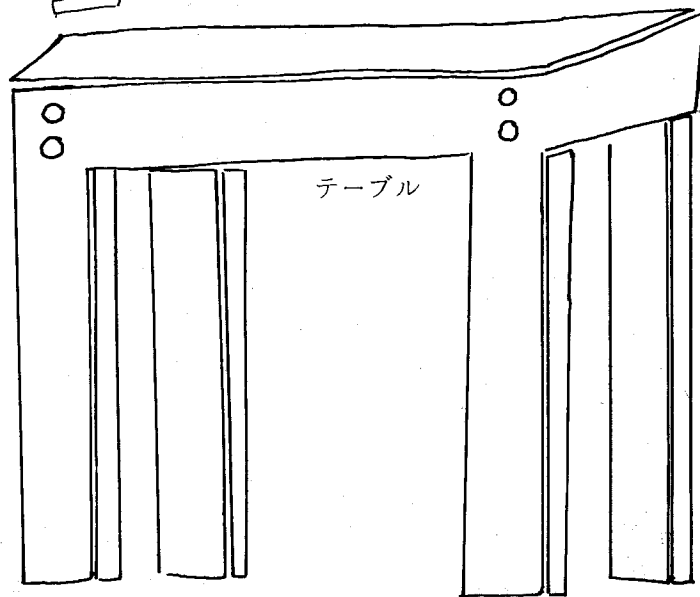
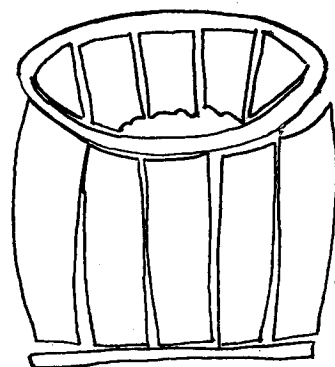




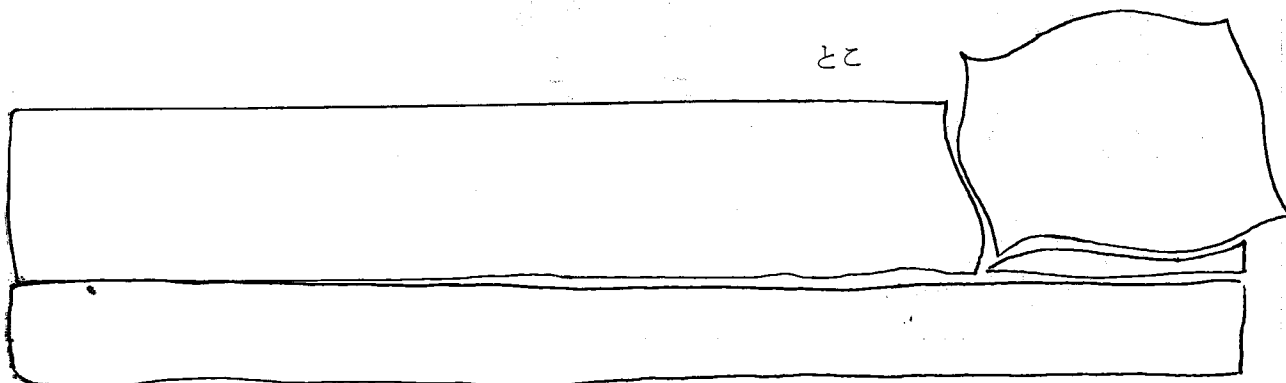
びんのあぶら



かめのこな



とこ



ひつじかいの少女

「ひつじが6ぴき、どこかにかくれてしまったの。」「つえもないわ。」
さあ、みんなでさがしてあげましょう。

ジュディー・ケイプナー



神権者に与える勧告

— 神権の権能の活用 —

何年前か、私は神権の偉大さについて、ひとつの教訓を学んだ。それは、忘れもしない1935年4月20日、大管長会の呼び出しを受けて、大管長会のオフィスを訪れた日のことであった。私は、そのとき、ソルトレーク市理事であり、またステーク部長でもあった。

当時、教会は福祉の問題と取り組んでいた。政府の雇用事業には見るべきものもなく、教会の財政も窮迫していた。教会の財政に関するかぎり、あまり頼りになるものはない、と言われた。このソルトレーク市だけでも、部分的にせよ全面的にせよ、他人に頼って生活している人々は、7,300人のうち、4,800人にも及んでいた。もはや、なすべきことはひとつしか残されていない。それは啓示に示された主の御計画を適用することであった。

大管長会が私たちのささやかな経験を知り、ある朝電話をかけて、私に大管長会のオフィスを来てほしいと言ってきたのは、私たちの小さな努力の結果であった。土曜の朝のことであり、オフィスの予定表には、訪問者の予定はなかった。その朝、私たちは何時間にもわたって話し合い、大管長会の方々は、私に市理事を辞職するよう要請した。また、私をステーク部長の職から解任し、政府から直接救済を受けようとする風潮を変えるため福祉活動を指揮し、教会が自らその貧困者の面倒をみることができるよう、私の助けを借りたいと願った。

その朝の話合いの後、私は自動車に



大管長 ハロルド・B・リー

揺られて（ちょうどスプリングがこわれていた）、シティー・クリーク・キャニオンの頂の、当時ロータリー・パークと呼ばれていたところに登った。そして、そこで私は、たったひとりになって私の生涯で最も謙遜な祈りのひとつとも言える祈りをささげた。

このとき私は、30代半ば、言わば弱輩の身であった。それまでの経験も豊富とは言えなかった。アイダホの小さな田舎町で生まれた私は、ユタとアイダホの州境を越えて出たことも、ほとんどなかった。それなのに、このとき私の双肩にかけられた責任は、世界のすべての教会員にまで及ぶものであり、想像するだけでも二の足を踏みたくなるような思いであった。私の限られた知識で、一体どのようにすればよいのだろうか。

私はひざまずいて、次のように熱心に祈った。「大管長会から与えられた

責任を果たすために、どのような種類の組織を作ったらよいでしょうか。」そして、私はこの美しい朝、神権の権能の重大さを認識する機会を得たのである。何か次のような言葉が私の耳もとでささやかれたように感じた。「教会員の必要を満たすために、何ら新しい組織は必要としない。ただ神権の機能を完全に働かせるだけでよい。他には何もこれに代わるものは必要としない。」

これを十分に認識し、単に神権の権能を活用するだけで、以来、福祉計画は急速な勢いで大きな発展を遂げ、一見不可能と思える障害をも乗り越え、今や神権の権能の記念碑として雄々しくそびえ立っている。あの頃、私は今日の隆盛の一端をかい間見ただけだったのである。

では、こうした神権の権能を充分理解した上で、今宵、私は思いつくままに、その他の事柄を2、3述べたいと思う。

あなた方に考えていただきたい聖句がふたつある。時の絶頂における救い主の訪れのあとの時代同様、このふたつの聖句は、使徒時代以降の今日においても充分あてはまるものである。使徒行伝の中で、使徒パウロは、イスラエルの長老たちに次のように注意を与えている。パウロはこう語った。

「どうか、あなたがた自身に気をつけ、また、すべての群れに気をくばっていただきたい。聖霊は、……神の教会を牧させるために、あなたがたをその群れ

「教会員の必要を満たすために、何ら新しい組織は必要としない。ただ神権の機能を完全に働かせるだけでよい。他には何もこれに代わるものは必要としない。」

の監督者にお立てになったのである。

わたしが去った後、狂暴なおおかみが、あなたがたの中にはいり込んで、容赦なく群れを荒らすようになることを、わたしは知っている。

また、あなたがた自身の中からも、いろいろ曲ったことを言って、弟子たちを自分の方に、ひっぱり込もうとする者らが起るであろう。」(使徒20:28-30)

そして、使徒パウロはガラテヤ人にも次のように書き送った。

「あなたがたがこんなにも早く、あなたがたをキリストの恵みの内へお招きになったかたから離れて、違った福音に落ちていくことが、わたしには不思議でならない。

それは福音というべきものではなくただ、ある種の人々があなたがたをかき乱し、キリストの福音を曲げようとしているだけのことである。

しかし、たといわたしたちであろうと、天からの御使であろうと、わたしたちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その人はのろむべきである。

わたしたちが前に言っておいたように、今わたしは重ねて言う。もしある人が、あなたがたの受け取った福音に反することを宣べ伝えているなら、その人はのろむべきである。

……兄弟たちよ。あなたがたに、はっきり言っておく。わたしが宣べ伝えた福音は人間によるものではない。

わたしは、それを人間から受けたのでも教えられたのでもなく、ただイエス・キリストの啓示によったのである。」(ガラテヤ1:6-12)

この警告は、警告が与えられた当時と同様、今日でも正確に的を射ている。

私たちの中にも、おおかみのような者がいる。つまり、当教会の会員であると言っておきながら、群れを荒らしている者がいる、ということである。また、会員の中に、いろいろ曲がったことを言っている者もいる。ここで言う「曲がったこと」とは、教会のまだ信仰の浅い会員を、自分の方にひっぱり込むために、故意に正しい原則から目をそらし、悪に固執することである。

また、使徒パウロが言ったように、当時と同様、今日でも、次のことは私たちには不思議でならない。それは会員の中に、非常に早く、福音を教えてくれた人々から離れ、また、キリストの福音の真実の教えから離れて墮落し、悪意悪計に満ちた慣習と儀式を行なうような背教の道を歩み出す人々がいるということである。

こうした背教者グループの幾つかが予想もしない出来事によって事実を証明しているように、彼らは予言者の警告どおり、のろいを受けている。こうした人々は、明らかに、時の初め以来サタンに雇われて、あらゆる詭弁をろうし、弱い人々を陥れようとする悪の力の影響を受けているのである。

ここで、今述べたような種類の問題について一言申し上げたいと思う。第一は、前にも述べたことであるが、うわさやゴシップを広めることについてである。うわさやゴシップというものは、一度話の種になると、加速度がついて話のたびに面白おかしく脚色されついに、人騒がせの好きな人々が出所を確かめようともせず、知らず知ら

ずのうちにファイヤ・サイドや日曜学校のクラスや扶助協会や神権定員会のクラスで繰り返し話してしまうのである。こうして、このような会合は、賢明に使われれば、有益で、人々の精神にとって啓発的なものになるものを、ただただ無為に用い、憶測と空論の場と化してしまうのである。

ひとつの例を示そう。あなたの方のうち、どれほどの人がこの話を聞いているかは知らないが、私が救い主の降臨とイスラエルの十支族に関する祝福師の祝福を受けているらしいという話が広く流布されているということを聞いている。

まず第一に、祝福師の祝福というのは、祝福を受けた人、個人に与えられる神聖な文書であって、決して公の用に供するために与えられるものではない。そして、すべての祝福師の祝福同様、祝福を受けた人の個人的所有として保存されるべきものなのである。

次に、私が前述のような祝福を受けているらしいということについてであるが、そのような話は間違いであり、事実無根であると言っておけば充分であろう。

ひとつ私が驚いたことがある。それは、たまたまある機会に、前述のようなうわさは根も葉もないことであると言うと、すでにうわさを耳にしている人々の中に、がっかりする人がいるということである。そのような人々は、根も葉もないうわさを信じて楽しんでるように思えるのである。私は、そのような愚かなうわさを、その真実性を確かめもせず、広くまき散らすなどということを決してしないよう、強

「何人も自らを支配者なりと思うべからず。されど神をして審く人をその聖旨のままに支配せしめよ。すなわち議する者または審判の席に坐する人を聖旨のままに支配せしめよ。」（教義と聖約58：20）

く促したいと思う。

1913年8月、大管長会は教会員に警告の書簡を出したが、今日ここで再読しても価値があるだろう。その中から2、3読んでみたいと思う。

「末日聖徒イエス・キリスト教会の役員、会員各位へ

ハイラム・ページのとき（教義と聖約28章）以来、折々、教会員に対する偽りの霊の現われが起きている。時にこうした現われは、罪を犯したために大偽り者のえじきとなった男女に起きている。またある場合には、教会の規則や儀式や様式を厳守していることを心からの誇りにしている人々が悪霊によって背教に導かれている。悪霊たちは、余りにも神からでたものと似た影響力を行使するために、自らを『選民』と考えているこのような人々でさえ、その本質的な違いを識別するのに困難を感じているのである。サタン自身がその身を変えて、『光明の天使』らしく見せかけるのである。

示現、霊夢、異言の力、予言、印象あるいは非凡な場、靈感などが、これまで受け入れられている教会の啓示と調和しないものであったり、正統な権威者の決定に反するようなものであるなら、それが、どんなにもっともらしく見えようとも、末日聖徒たる者は、それが神から出たものではないと知らなければならない。また、教会を導くための決定は、教会の頭を通して、啓示によって与えられるということも理解する必要もある。教会の忠実な会員は皆、自分自身のために、自分の家族のために、そして自分が指名され、聖任された管理の職のために、聖霊のさ

さやきを受ける資格がある。だが、教会の長たる者をおして神から与えられたものと一致しないものはすべて、権威ある、信頼すべきものとして受け入れられるべきものではない。霊的な事柄もこの世の事柄も、聖徒たちは自分自身のことに関する導きと啓示を受けることができる。だが、これは決して、他人に指図する権威を持つというのではなく、またそうした導きが、教会の契約や教義や規律、証明ずみの事実や真理、また良識に反する場合には受け入れないことが必要である。どんな人でも、いかにもっともらしい啓示や示現や霊夢を神から受けたと主張して、兄弟姉妹たる教会員を説いて、投機や株の操作に身を投じさせる権利はない。特にそれが、局地的なものであれ、全教会的なものであれ、承認ずみの権威に反するものである場合、なおのことである。主の教会は、『秩序の家』である。主の教会は、個人に与えられる賜物や現われによって統治されるのではなく、指定された大会において、教会員の挙手により支持された聖なる神権の秩序と権能によって統治されているのである。

教会の歴史には、霊の現われを信じてみせかけの啓示を受けたと主張し、それを受け入れる人々を導ぼうと虎視眈々とねらっている詐欺師や熱狂者の例が数多く記録されている。そしてその結果生ずるものは、いつの場合でも、失望、悲嘆、そして不幸である。さらに財政的損失、時には完全な破産さえそれに伴って起きることもあるのである。」

この警告は、時に触れ、折に触れて

再三再四発せられてきたものである。神権者であるあなた方に申し上げたい。「不思議な」種類の霊の現われを受けたと主張する人々が、ここかしこで立ち上がり、いまだかつて教会の指導者が指示したことのない方向へ教会員を導こうとしている。このように人々の心に忍び入ろうとしているものに対し、雄々しく立ち上がり、排斥する努力を始めていただきたい。

たびたび言うが、教会員の中に、いとも簡単にだまされる人々がいるということに、私は驚きを禁じえない。このような人々は、人騒がせな話や夢や示現のうわさをまき散らし、おそらく個人的な日記から取ってきたのだろうが、昨今の教会の指導者に与えられたと言われている話を、適当な教会の権威筋に確かめることもせず、広めているのである。

もし私たち教会員が、策略と偽りのうわさに満ちたこの喧噪うずまく時代にあって安全に導かれたいと願うのなら、手練手管にたけた者たちのえじきになるのを防ぐために、指導者に従い主のみたまの導きを求めなければならない。そのような者たちは、巧妙な詭弁をろうして注目を集めようと画策し自分の意見に、また時には悪意を含んだもくろみに追従する人々を味方に引き入れようとしているのである。

主は、ある種の神権の権能を受けているとひそかに言い張る人がいるときだけでもその真偽のほどを確かめることができるよう、非常に明確に、ひとつの方法を設定された。次の聖句は教義と聖約42章11節にある主の御言葉である。

「君たちに一言言いたいことがある。君たちは神の予言者をその地位から失脚させることはできないのだ。だが、君たちは、自分と予言者とをつないでいる糸を断ち切ることはできるのだよ。そうすれば地獄へ落ちることもできるのだが……。」——ブリガム・ヤング

「またわれ汝らに告ぐおよそ誰か権威ある者より聖職に按手任命され、またその者の権威を有てることと、教会の長たる者たちより正式の按手聖任を受けたることが教会員の知る所にあざれば、何人といえどもわが福音を宣べんために出て行くこと、または教会を創立することを許されざるべし。」

それゆえ、だれか権威を持っていると主張する人が来たら、「その権威をだれから受けましたか。だれか権威ある人から聖職に按手聖任を受けたのですか。あなたが権威を持ち、教会の長である人々から正式に按手聖任を受けたということを、教会員は知っているのですか」と尋ねてみるとよい。もし「いいえ」という答えだったら、その人が詐欺師であることがわかる。教会員たちは、だれか教会員を背教に導こうとする詐欺師が来たときには、いつでもこの方法を応用すべきである。

次に、私たちに襲いかかろうとしているもうひとつの危険がある。私たちの中に、群れの中のおおかみのように教会員のうちのまだ信仰の弱い人々を背教に導こうとしている者がいるらしいということである。私たちの手もとに届いた報告によれば、合法的な政府との間に若干の政策的な不一致があるとの理由で、法律を自分勝手に処理して、所得税を納めない人々がいるとのことである。

また、警察権もないのに一般市民を扇動して、起こりうる危険と戦うために自ら武装している人々もいるとのことである。こういう人々は、そのようなことをして政府当局に反抗することにより、自分自身が逮捕されたり、投

獄されたりする羽目になるのだということ、露ほどにも知ってはいないのである。

また、教会員の中に、劇場でポルノ映画が上映されるのに反抗して、劇場に爆弾を仕掛けたために、法律によって罰せられ、その後懲戒のために教会の法廷に立たされる人々もいるということさえ、耳にしている。

いわゆるポルノのたぐいのみだらで挑発的なものをしめ出そうとしている人々を私たちは強く支援しなければならないが、ただ、前述のような急進的な方法をとろうとする人々には、次のようなやり方だけしかないということを知っていただきたい。次は主の御言葉である。

「何人も自らを支配者なりと思うべからず。されど神をして審く人をその聖旨のままに支配せしめよ。すなわち議する者または審判の席に座する人を聖旨のままに支配せしめよ。

何人もその国の律法を破ることなかれ。……統治すべき権能を持ちてすべての敵を脚下に踏みつくる者の統治する時の至るを待つべし。」(教義と聖約 58:20, 22)

私は、この偉大な神権者の群れが、ソドムとゴモラのあの大いなる罪に対抗するよう、強く警告したいと思う。その罪は、殺人の罪に次いで第二に重大な罪と呼ばれているものである。御存知のように、私は、主が姦淫と呼んだ罪について言っているのである。主はそのとき、非合法的な性関係の罪も姦淫と同列に扱っておられた。また、同じような重大な罪に同性愛がある。この罪も、バビロンのような世の中に

あって、加速度的な速さで社会的に受け入れられつつあるように思える。だが、教会員たる者は、決してこのような傾向に追従してはならない。

世にあっても、世のものとなってはならないのである。学校や歓楽の場では、人々を刺激して実際の行動に向かわせようと、これ見よがしに種々、性的に倒錯した試みを行なっているが、この教会の神権者たちは、このような攻撃に対し、可能な限りの合法的な手段を用いて、雄々しく確固たるとりでを築き上げなければならない。

イスラエルの判事である監督、ステーク部長たちがその管理区域で懲戒の処置をとる際の指示は、誤解のしようがないほど明確で簡潔なものである。主の律法とその手続きをはっきりとふまえて、決してその適用をためらったり、避けたりするようなことがあってはならない。悔改めをせず、罪深い行為から真実悔い改めた人にだけ約束されている正義の原則を踏みにじるような罪人には、いかなる慈悲を施してもならない。

もうひとつのことについて話そう。私たちの間に、今襲い来つつある災害に関する不正確な情報が流れているということである。そのうちの幾つかの情報は、まさに襲い来つつある恐怖から世の人々の目を覚まさせることが必要であるとも言うように、既に印刷出版に付されている。だが、このうちの多くは、その出所がそれほど定かでない所から出たものである。

あなた方神権者は、もし私たちがこれまで聖典に明確に記されていることに精通していさえすれば、こうした、

「今日、私たちを取り巻く数々の問題は、私たちの多くが、主の御言葉の後に終止符ではなく疑問符を打っていることに起因している。」

者ジョセフを大管長の地位から退けようともくろむ人々の集会に招かれた。だがブリガム・ヤング十二使徒定員会会長を自分たちの仲間に引き入れようとしたのが失敗だった。ブリガム・ヤングは彼らの計画を一通り聞くと、次のような趣旨のことを言った。「君たちに一言言いたいことがある。君たちは神の予言者をその地位から失脚させることはできないのだ。だが、君たちは、自分と予言者をつないでいる糸を断ち切ることはできるのだよ。そうすれば地獄へ落ちることもできるのだが……。」

話を続けるが、そこにはジェイコブ・バンパという名前のプロボクサーがいた。この男は、こぶしを固く握りしめると、ヤング会長に向かってなぐりかかろうとした。ヤングはこの男の脅しに答えて、次のように言った。「予言者ジョセフ・スミスを守るために、君のような男には、頭の上に手を置いて悪霊を叱責してやりたいものだよ。」

兄弟たちよ、これを忘れないでいただきたい。神の予言者をその地位から失脚させることはできないのである。主がこの教会を管理することを望まれる人物は、主御自身が知っておられる。だが、時にはそのために、数多くの訓練と指導と試練を必要とすることもある。そして、やっとその後で、私たちのうちだれが現在の責任を受ける準備ができているのかを主が識別されるのである。

また私は、ある大管長を他の大管長と比較するということは、極めて愚かなことであると考えている。ある大管長が、他の大管長と同じ立場にあると

いうことはない。それぞれの大管長にそれぞれの立場があるのである。私は数年前、ひとつの教訓を得た。それは教会幹部のひとりの兄弟と共に、エンサインステーク部のステーク部長会を再組織したときのことである。私たちは、既にあるワード部の監督をステーク部長に指名していた。だが年末だったために、その監督は、年末の書類の決済が終わるまで監督の職に留まって後任の監督になるはずの第一副監督と仕事を続けたいと申し出た。

そして、支持を受けた6週間後にそのステーク部長が突然亡くなった。

すると、私あてに次々と数多くの手紙が届き始めた。ただの6週間で、主が、死ぬことをよしとされるような人を召すなんて、一体全体どんな靈感を受けたのか、と言うのである。また彼の葬儀で話をするようにも促していた。ある人々の手紙は、ただの6週間で主が御自分のもとに引き上げられるような人をなぜ私が指名したのか、説明してくれるよう望んでいる書きぶりであった。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は、壇上の席で、私がこの人々から満足してもらえる答えをしてあげたいと努めているのを聞くと、私に次のように言った。「その問題であまり悩まないで下さい。ある人をこの教会のある職に召して、翌日その人が亡くなったとしても、その職は、その人がこの世を去って、来世で召される職に何らかの関係があるのですよ。」

私はこのことを信じている。私は、この教会の大管長、使徒、監督、ステーク部長などの管理の地位にある人々

の職は皆、この世を去って、来世で召される職に何らかの関係があると信じている。

それゆえ、ある大管長は、前の大管長の仕事を引き継ぐものと考えているかも知れないが、そうではないのである。その大管長には自分だけに課せられた仕事があるのである。だから私たちは、この人はあの人より偉大だとか立派だなどという比較をしてはならないのである。主の目から見たら、人は皆主の時にかなって、ある特別の時のために主が最も必要とされる人なのである。あなた方はこれを確信していることと思う。

最後にもうひとつお話ししよう。ある日、私が自分のワード部の日曜学校のクラスに出席していたときのことである。そのクラスの教師は祝福師の息子であった。彼は、以前自分の父親の祝福の鼻をあかしてやろうとしたことがある、と言った。そのとき彼は、父がいわゆる「あやふや」な祝福を与えているのに気づいたのである。父親は祝福を与えはしたが、それは皆、「これこれをしてしないなら」とか「これこれをしなさい」とかという条件つきで述べられていたのである。そして、その教師は次のように結んだ。「私は父が『あやふや』な祝福を与えた人々を見守っていました。そしてその人々のうち多くが、祝福師である私の父が与えた警告に注意を払っていないことに気づきました。その人々は、警告に従わなかったがゆえに、決してその祝福を受けることはなかったのです。」

この言葉を聞いて、私が思案を始めたことはおわかりと思う。私は、初心

「私は福音が真実であることを知っているの
だから、ほかに何も心配することはない。」

に戻って教義と聖約を開き、教会の様々な兄弟たちに与えられた「あやふや」な啓示を読み始めた。もし、何か慄然とする経験をしたと思うなら、予言者ジョセフ・スミスを通して、トーマス・B・マーシュ、マーテン・ハリス、ホイットマー家の幾人かの兄弟、ウィリアム・E・ムレリンに与えられた警告を読んでみるとよいだろう。この人々が、この警告に注意を払っていたなら、そのうちの何人かは、わき道にそれないですんだであろう。だが、警告に注意を払わず、その生活を意義あるものとしなかったために、わき道にそれてしまったのである。さらに、教会の会員の資格をも失った者さえいたのである。

私たち皆が、心に留めておくべきことがある。神殿の中で、宣教師のグループと集会を持っていたときのことである。ひとりの姉妹宣教師が知恵の言葉について質問した。もし人が知恵の言葉を守れば、走っても疲れず、歩いても気を失うこともないという約束についての質問であった。その姉妹宣教師は次のように言った。「足の悪い人には、どのようにこの約束が成就するのですか。もし足が悪かったら、走っても疲れず、歩いても気を失うことがないという祝福はどのように成就するのですか。」

私は答えた。「あなたはこれまで主を疑ったことがあるのですか。主がそう言われたのですよ。」

今日、私たちを取り巻く数々の問題は、私たちの多くが、主の御言葉の後に終止符ではなく疑問符を打っていることに起因している。このことを深く

考えていただきたいと思う。私たちはなぜ主がそのような啓示を与えられたのかとか、なぜそのように言われるのか、などということに関心を払う必要はない。ただ、主を信頼しなさい。私たちは、解答や説明を見つけ出そうとは思わない。私たちは、主が説明を加えるのをよしとされなかったことを説明するのに、時間を費やすべきではない。時間を浪費するだけだからである。

もし教会員に、主の御言葉の後に、疑問符ではなく終止符を打つことを教えるなら、教会員は常に次のように言うであろう。「その言葉が主の御言葉であるということを知れば、それで充分です。」

ゴードン・B・ヒンクレー長老がベトナム訪問から帰って、私にひとつの話をして下さったが、その話は私にとって偉大な教訓となった。私が覚えている範囲でお話するが、ベトナムで軍務に服している間に教会に加入したひとりの青年がいた。その青年は、服務期間が終わって、東南アジアにある本国へ帰るところであった。

ヒンクレー兄弟はその青年に言った。「君はここで教会に加入したわけだが家へ帰ると、どういうことになるのかね。」

青年は答えた。「追い出されることになるでしょう。家族は私を勘当するでしょうから、学校へは行けなくなります。もう軍の仕事もありませんし。」

ヒンクレー長老は尋ねてみた。「それは、教会に加入した代償としては、ちょっと大きすぎやしないかな。」

すると、この青年はヒンクレー長老をじっと見つめながら、言った。「で

も、福音は真実ですから。違いますか。」

これは、ヒンクレー兄弟の魂を揺さぶるような言葉であった。ヒンクレー兄弟は答えた。「真実だとも。間違いないよ。」

これを聞いて、青年は言った。「じゃ、ほかに何も心配することなんかありません。」

神権を持つ兄弟たちよ。イエス・キリストの福音が真実なら——それは確かに真実ではあるが——ほかに何を心配する必要があるだろうか。もし私たちが、いつも自分に、「私は福音が真実であることを知っているのだから、ほかに何も心配することはない」と言い聞かせているなら、この危険きわまりない世の中であって、主が確かに私たちを導いて下さるという根本の証が得られ、祝福が得られるのである。

これが真実であることを、また主が天におられることを、そしてあなた方が思っているよりもずっと近くにおられることを、謹んで証する。主がこの教会に最後の啓示を与えられたのはいつかと尋ねる人がいる。主は日に日に啓示を与え続けておられる。そして、あなた方が将来、この時代を振り返って見るとき、主がこの時代に幾つかの力強い啓示を与えて下さったということをはっきりと認識するであろう。私はこれを証する。今宵、あなた方の心に私の証を残すべく、主イエス・キリストの御名によって祈る次第である。アーメン。

*チャールス・A・コーリス (1865—1947) アイルランド生まれ。1933年10月12日使徒に聖任さる。

神権と神権を管理する職

— 神 権 組 織 と 大 管 長 職 の 継 承 に 関 する 説 明 —

神権とは、私たちの持つ職において神の御名によって行動するため、私たちに付与された神の権能である。そして、神がこの神権を私たちに与えたもうとき、私たちは神と誓約し、神もまた私たちと誓約を結ばれるが、私は今宵、その誓約を読みたいと思う。

「およそ忠実にして……二つの神権を得、（これは、例えば執事なら執事で、彼がこのふたつの神権を保持することができるよう、与えられた責任を果たすことから始めなければならないということである）而してその天よりの召を全力を尽して遂行する者たちは『みたま』により聖められてその肉体再新さる。

これらの者はモーセの息子たちとなり、アロンの息子たちとなり、アブラハムの子孫となり、また教会員にして王国の民となり神の選民となる。

主は言う、またすべてこの神権を受け入る者は、われを受くるなり。

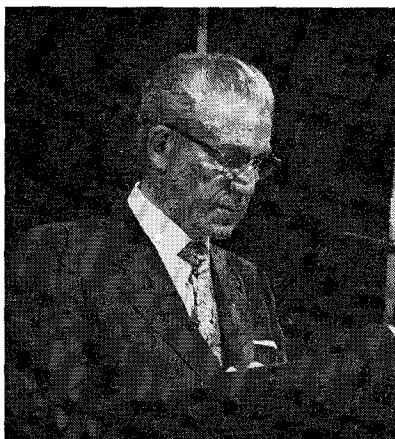
そは、わが僕らを受け入る者はわれを受くればなり。

また、われを受け入る者はわが父を受くるなり。

而して、わが父を受け入る者はわが父の王国を受くるなり。この故にわが父のもてるすべては彼に与えらるべし。

而してこは神権に属ける誓詞と誓約によりて然るなり。

この故にこの神権を受くる者は、すべてわが父のこの誓詞と誓約とを受け、而してこれをわが父は破ることも



第一副管長

N・エルドン・タナー

変えることも為したもうはずなし。

されど何人にまれ一度この誓約を受けて後これを破り、またことごとくこれに違背する者は……罪の赦しを受くことなかるべし。」（教義と聖約84：33-41）

この誓約が守られるかどうかは、私たちにかかっている。私たちもその誓約を結ぶのであるが、主がこの誓約を破られることはありえないため、この誓約を守る責任は私たちの方にあるのである。

今宵、私は神権の秩序、すなわち、神権の指示の下にある事柄の中から少しお話したいと思う。この問題が、アロン神権者の人々にも、他の人々同様関心をひくであろうと考えたからである。まず第一に、大管長の死後、いかにして後任の大管長が選ばれ、聖任され、任命されるのか、またいかにして大管長会が再組織されるのかの問題に

ついて説明したいと思う。この大管長会の再組織に引き続いて昨日行なわれたように、大管長会の会員は、聖会で神権定員会の支持の挙手を受け、一般大会で、出席した教会員の支持の挙手を受け、さらに、数々のステークス大会で全教会員の支持の挙手を受けるのである。また、私は、大管長の権能、義務、責任の幾つかについても、お話ししたいと思う。

大管長の逝去に伴い、大管長会の組織は消滅し、ふたりの副管長は、十二使徒定員会の中の自分の聖任順位に戻る。そして、啓示によって、この十二使徒定員会が教会の管理定員会としての責任を受ける。これは、十二使徒定員会が聖なるメルケゼデク神権を保持し、教義と聖約によって、権能においては次位の定員会だからである。（教義と聖約107：23, 24参照）それゆえ、教会は決して管理定員会なしに存在することはないのである。必然的に定員会会長が首席幹部役員となり、大管長会が再組織されるまで、十二使徒定員会が教会の管理定員会として留まるのである。

予言者ジョセフが大管長でいる間に主はジョセフを通して、十二使徒定員会に大管長会と同等の権能を持つ神権の鍵を与えられた。それゆえ、予言者ジョセフの死後、その権能を引き継いだ十二使徒定員会が、ブリガム・ヤングを定員会会長として、数年間、教会を管理したのである。しかし、ついに「聖きみたま」に動かされて、ブリガム

ム・ヤングを大管長、ヒーバー・C・キンボールとウィラード・リチャーズを副管長とする大管長会を再び組織した。実際は、予言者ジョセフ・スミスの死後24時間以内に、この組織を作ることでもできたはずである。

ヤング大管長の死去に伴い、ジョン・テイラー十二使徒定員会会長は、同じ方法で前任者の模範に倣ったためジョン・テイラーを大管長、ジョージ・Q・キャノンとジョセフ・F・スミスを副管長とする大管長会を再組織するまで若干の時間がかかった。

テイラー大管長の死に際して、当時十二使徒会会長であったウィルフォード・ウッドラフがちゅうちょしたため大管長会が再組織されるまでに若干の時間がかかった。だが、ついに、それが自分の義務であると確信し、主の目的を達成するためには引き受けなければならないと感じた彼は、十二使徒定員会と共に、大管長会を再組織した。

このとき、彼は次のことに関して同僚の兄弟たちに厳粛な指令を出した。彼は次のことを理解して欲しかったのだった。それは、将来大管長が死去し大管長会が解散したときは、教会の然るべき幹部は、不要な遅滞を避け、すぐに手続きを踏み、大管長会を再組織する義務がある、ということであった。以来、この手続きに従って行なわれている。

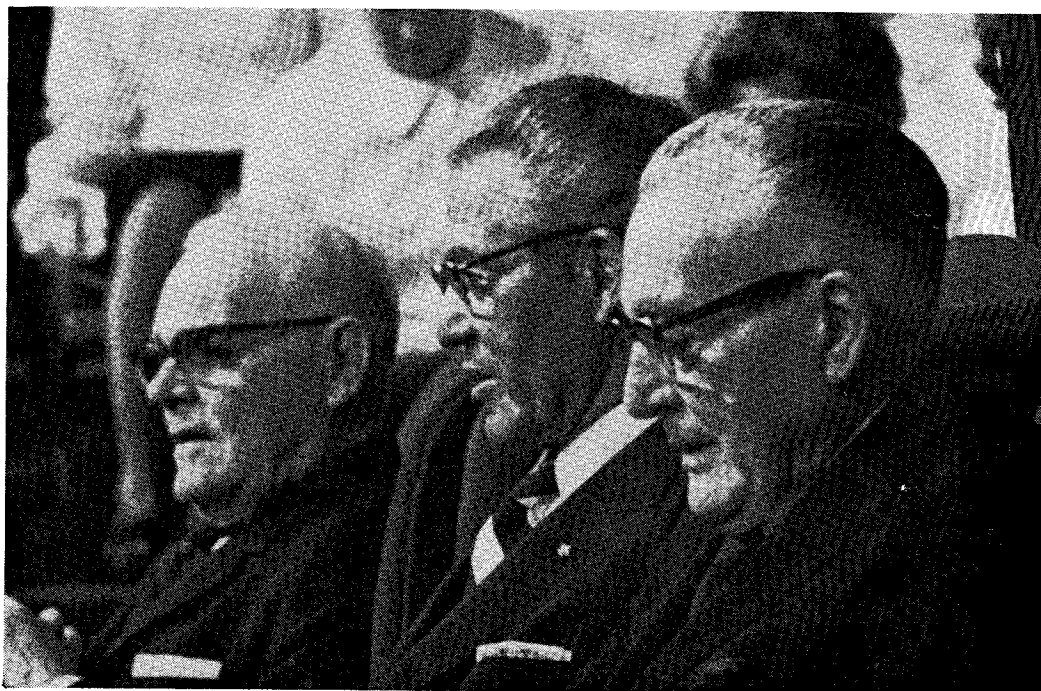
それゆえ1972年7月7日、ジョセフ・フィールドینگ・スミス大管長の死後間もなく、リー現大管長は十二使徒定員会会長として、大管長会を再組織するため、全十二使徒を召集した。

この集会で私たちは厳粛な祈りの中に主を呼び求めた。そして、十二使徒定員会の会員は、定員会会長にひとりずつ名前を呼ばれ、聖任順位の若い使徒から順に、当面の問題に関して自分の気持を表明した。

そして、その順番がキンボール現十二使徒会会長に回って来たとき、彼は自分の気持を述べ、結びに、リー十二

ン・タナー、第二副管長としてマリオン・G・ロムニーをそれぞれ指名推薦した。これも満場一致で承認された。

こうして、十二使徒定員会の最先任使徒となったスペンサー・W・キンボール兄弟は、十二使徒定員会会長としての指名推薦を受け、これも承認された。この後、キンボール現十二使徒会会長は、他の十二使徒会の会員と共に



使徒定員会会長が大管長として支持されるよう指名推薦した。この動議は正式に採択され、十二使徒定員会の討議に付された後、満場一致で承認された。リー十二使徒定員会会長は、この推薦と十二使徒定員会の決定に応え、その高く神聖な召しに応じたのである。この後彼は、十二使徒定員会の考慮に付するため、第一副会長としてN・エルド

リー十二使徒会会長の頭の上に手を按いて、彼を大管長として、予言者、聖見者にして啓示を受ける者として、また末日聖徒イエス・キリスト教会信託統治者として聖任し、任命した。さらに、リー大管長は、タナー兄弟とロムニー兄弟を副管長として、キンボール兄弟を十二使徒定員会会長として按手任命した。

今年が合衆国の選挙の年であるためこうした一連の行動は、合衆国大統領や他の政府役員を選出するときの方法と、主が教会の指導者に示された役員の選出、任命の方法との間に見られる好対照を一層興味深いもの にしている。私はこれまで3人の神の予言者と苦楽を共にし、彼らの指示の下に働き、彼らを支持する素晴らしい特権にあずかりまた主がその人々を通し、いかにして御業を進められるのかを見てきた。私はこのことを心から主に感謝している。私がへりくだって絶えず祈ることは、主と教会員に喜ばれる方法で仕えたいということである。

私は、この場を借りて、マリオン・G・ロムニー副管長に対して、深い愛と感謝の念を表わしたいと思う。私はロムニー副管長とリー大管長に対し、これまでなかったほどの強い愛を感じるようになっていいる。また私が愛について語るとき、十二使徒評議会会員の皆様に、他の教会幹部の皆様に、さらにすべての教会員の皆様にに対し、愛の気持ちを抱いていると申し上げたいと思う。事実、私は全人類に対して愛の気持ちを抱いている。ただただいつも祈るのは、主の助けがあって、私のその愛を何か目に見えるもので示すことができたなら、との願いである。 ●

リー大管長は、神の予言者となり、大管長となるべく選ばれ、予任されていた方であると私は確信している。主は確かに、この高く神聖な召しに備えて、彼に福祉計画の主事として、また30年以上も十二使徒評議会の会員として、数々のステークスを指導するよう

責任を与え、彼を育ててこられたのである。そしてリー大管長はこれまで自分の忠誠と献身と能力を立証してきた。リー大管長は、世界の歴史中、最も重大な時代のひとつとも言うべきこの時代に教会を管理するよう選ばれたのである。リー大管長は神の予言者であり神のみこころを語る人である。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は、大管長としての支持を受けた聖会で、次のように意味深い所見を述べた。

「私は、自分の力でこの教会を指導できる人間はひとりもないと申し上げたい。これは主イエス・キリストの教会であって、キリストがその頭なのである。教会はキリストの名をいただき、キリストの神権を持ち、キリストの福音の儀式を施し、キリストの教えを説き、キリストの業をなしている。

キリストは人々を選び、召し、主の目的達成のために御自身の道具となし彼らを導きたもうのである。しかし、人々はあくまでも主の御手にある道具であって、主の僕がなし遂げるあらゆる誉れと栄光とは永遠に主に帰せられる。

もしこれが人の業なら、失敗することもあるが、それは主の御業であるがゆえに、しくじることがない。もし我々が戒めを守り、イエスへの証を雄々しく述べ、託されたことに忠実ならば、主はそのあらゆる目的を成就するために、義なる道にある我々と教会を導きたもうという約束がある。」（「聖徒の道」1970年10月号p.257）

スミス大管長はそのとき、現在の大管長である第一副管長について、次の

ように言った。

「ハロルド・B・リー副管長は真理と義の柱であり、偉大な霊の力と洞察力と知恵とを持った真の聖見者である。教会と教会が必要とする事柄に対する。知識と理解において彼に優る人はいない。」（同上）

主が予言者ジョセフ・スミスの第二副管長であったフレデリック・G・ウィリアムズに対し言われたように、「…汝語る者の声に、主なる汝の神の言に耳を傾けよ、……

われはジョセフ・スミスに王国の鍵を授けたるが、こは大神権の大管長会に常に属するものなり。

この故に、われ誠に彼を承認して祝福を授けん。また汝評議に、すなわちわが任じたる職務に忠実にして、また常に声を出しても心の中にも公にも秘にも祈る祈りに、また今生ける人々の国と汝らの兄弟の間に導きと教えを施す業に忠実ならば汝にもまた祝福を授けん。」（教義と聖約81：1—3）

この聖句はすべての神権者にあてはまる。

主が予言者ジョセフを教会を管理する職に召されたとき、ジョセフに言われた言葉が、現在、そのまま私たちの愛するハロルド・B・リー大管長にもあてはまる。「……汝は聖見者、翻訳者、予言者、イエス・キリストの使徒……と称せられん。

この故に汝ら教会員は、彼が上より受くるままに汝らに与うる誠命と彼の言とを皆心にとめてよく聞き、わが前に全く聖き道を履むべきなり。

そは彼の言は、汝ら全き忍耐と信仰

とを以て、あたかもわが口より聞くが如くにこれを受け入るべきなればなり。

これらのことを為さば、地獄の門も汝らに打勝たざるべし。而して、誠に主なる神は汝らの前より暗闇の力を追い払い、汝らの為と神の御名の栄光のためにもろもろの天をも震い動かしめん。

主なる神かくの如く言う。われは彼に靈感を与えて、善を為すために大いなる力を以てシオンの大事を推し進めしむ。われ彼の勤勉なるを知り、また彼の祈りを聞けり。

見よ、われはわが葡萄園に働く者に大いなる祝福を与えれば、彼らは彼の言を信ぜん。その言はかの『慰め主』によりわれを通じて彼に与えられ、然もその『慰め主』は、イエスが誠に悔いたる心を持つ者に罪の赦しを与えんがため、世の人の罪を負うて罪深き人々によりて十字架に付けらるることを世に表すなり。」(教義を聖約21:1, 4-7, 9)

執事である人々よ、教師である人々よ、祭司である人々よ、そして長老、七十人、大祭司である人々よ、神権を保持するということは、また今日私たちを導く神の予言者がいるということは、何という偉大な特権であろうか。

ジョセフ・F・スミスが、大管長について明確に述べたように、「教会のすべての役員は、大管長の管理の下にあり、大管長は神にしかれている。」(『福音の教義I』p.212)

これを常に忘れないようにしよう。大管長はメルケゼデク神権の鍵を持ち教会の中には大管長がつとめることの

できない仕事や職というものはない。事実、教会のあらゆる職は、大管長に属しているのである。

主は予言者ジョセフ・スミスに向かって次のように語られた。「また、大神権の職を管理する長たる者の義務は全教会を統轄すべきものにして、モーセの如くあるべし。

すなわち、見よ、この教会の頭首に神の与えたもうあらゆる賜を有し誠に彼は聖見者たり、啓示を受くる者たり、翻訳者たり、また予言者たり、ここに智慧現わる。」(教義と聖約 107:91, 92)

私たちが教会員として、無条件で、リー大管長を神の予言者として、また私たちの指導者として受け入れることは、最も大切なことである。私は心の奥底から、万感の思いを込めてこう言うことができるのを、この上ない喜びと感じている。予言者の声に耳を傾け予言者に従って行こうではないか。しかも盲目的ではなく、信仰によって従って行こうではないか。そうすれば決して道に迷うことはない。神権者である限り、だれもこの問題を軽々しく扱うことはできない。すべての会員がその神権の召しを全力を尽くして遂行し、また神権を持つことが偉大な特権であり、祝福であると認識することになることは、大切なことである。

私たちは、この信仰に誠を尽くさなければならぬし、あらゆる点で信頼に足る者とならなければならない。世に対する模範ともならなければならない。青年諸君に申し上げたい。あなた方が今持っている神権は、自分の職に

おいて神の御名により、行動するため私たちに付与された神の権能であるということを忘れないでいただきたい。主は、私たちひとりびとりが、この神権を行使するにふさわしく生活し、世の模範となるよう、望んでおられる。リー大管長が大管長に指名された直後に行なわれたインタビューで言ったように、また今日もこれまで言われてきたように、世に対する大管長のメッセージは、またこれはとりもおさず私たちひとりびとりに対するメッセージでもあるが、それは「戒めを守りなさい」ということである。私たちが戒めを守れば、必ず祝福を受ける。

私たちは、主が私たちのために一体どんな地位や祝福を用意して下さっているのか、全く知らない。どんな召しが来ようと、それに応ずることができるよう準備することは、私たちの責任である。エジプトに売られたヨセフは自分が民を救うために選ばれた人間であるなどとは全く考えてもみなかった。彼は、その忠誠と誘惑に打ち勝つことにより、主から祝福を受け、強められやがてその忠誠がよしとされたのである。

モーセもまた青年時代には、自分がイスラエルの民をエジプトから導き出すことになっているなどとは、つゆ知らなかった。モルモンも、初めのうちは、自分と息子モロナイがイエス・キリストの福音に関する神聖な記録を備え、保存するような偉大で重要な業に携わることになるとは夢にも思っていなかったのである。

どの場合も、彼らが子供のときから

その忠誠を身をもって示し、また召されたあらゆる地位にあって、自分がふさわしい者であることを立証し、主に受け入れられた結果なのである。

今日の午後、「シオンの若者真理を守り」と歌われるのを聞いて、私は胸にせまるものがあった。今宵、私の声を聞いているすべての青年には、次のことを主の前に立証してくれるよう、切に勧めたいと思う。それは、シオンの若者は決してひるんだことはないし今から後もひるむことはなく、むしろ世に対する模範となり、善のために良い影響力となるであろう、ということである。そして、立派な人間になりたいと思うなら、立派な子供であり、青年でなければならない、ということをお忘れいただきたい。私たちの大管長が青年時代にしたように、あなた方も自ら備えをなさない。

ジョセフ・スミスは14歳のとき、自分が大管長になり、神の予言者になるなどとは毛頭思っていなかった。彼が望んでいたことは、ただどの教会が真実が知りたいということであった。私たちは皆、ある目的のために予任されているが、ジョセフも予任されていた。そして、忠実に生活し、ふさわしいことを証明したために、この高い地位に召されたのである。私たちも予任された召しにふさわしく、またその職務を果たすことが出来るよう生活しようではないか。

リー大管長は青年のとき、よもや自分が大管長になろうとは夢にも思わなかった。だが、彼の召されたあらゆる職で忠実に働き、自分がふさわしい者

であることを立証したのである。もし主の御手に使われる器になりたいと望むなら、執事定員会会長や教師定員会会長は、長老定員会、七十人定員会、大祭司定員会の会長と同様、その義務を遂行し、主の御前に義しく歩むことが大切なことであると知らなければならない。主はすべての人がその義務を果たし、自分の結んだ誓約に忠実であるように望んでおられる。教義と聖約には、主の御言葉が次のように記録されている。「この故に、今や神権者皆各々その義務を覚え。また己が任命せられたる務めを全く勤勉に勤むべし。

およそ、怠惰なる者はその地位に居るに値せず、またその義務を覚らず信託さるるに足る行いを示さざる者は、その地位にある値なき者なり。誠に然り、アーメン。」(教義と聖約107:99, 100)

誠に、「戦いをいとうなら、報いはなし」と歌うとおりである。大切なことは、神権者が老いも若きも、自己を鍛え、悪に打ち勝ち、自らを道徳的に清く保ち、知恵の言葉を守り、安息日を聖くし、正直に行動し、他人の信頼を裏切ることなく、あらゆる友人、知人から愛され、尊敬され、そして人々がそのよい行ないを見て、天にいます私たちの父をあがめるように生活することである。

私たちは、主の御業が進展していることを認識し、主の王国である教会がこの地上で成長し、全地を満たすまで援助を続けなければならない。これこそ、神権者としての私たちの責任である。

人類が現世に在るのは幸福を得んためである。楽しい時間を過ごさない。正しいことを行なって人生を楽しみなさい。罪惡には、何ら喜びも満足もない。だが忠実な者には偉大な祝福が約束されている。私の説教に耳を傾けている青年で、自分が何の職に予任されているのか、自分のために何が備えられているのか知っている人はいない。だが主は次のように約束されているのである。「およそこれらの言葉を憶えて守り且つ行い、この誠命に従って歩むすべての聖徒らは(主はここで知恵の言葉だけを言っておられたのではなく、すべての戒めに従って歩むことを言っておられたのである)、そのへそに健康を受けその骨に髓を受けん。

また智恵と知識の大いなる宝まことに秘れたる宝を見出さん。

而して走れども疲れず、歩けども氣を失うことなからん。

主なるわれ彼らに一つの約束を与う。すなわち、さつりくの天使はイスラエルの小児たちが如く、彼らを過ぎ越して屠ることなかるべし。」(教義と聖約89:18—21)

願わくは、私たちが皆、主の教会の会員であり神権者であるという特権を朝な夕な主に感謝することができるよう。また勇氣と強さを求めて祈り、私たちのふみ行なうべき道に従って生活し、それによって永遠の生命に向かって私たち自身が準備し、また他人が準備するのを助けることができるように。イエス・キリストの御名により、へりくだって祈るものである。アーメン。

今、他の予言者をまた送らる

— 過去の時代のように、神は今予言者を通して語られる —

神の新しい予言者がこの現代に現われた。

彼は今の世に導きを施し、耳を傾けるすべての男女子供に天からの新しい啓示をもたらすべく神より召された、靈感豊かな人々の系譜のひとりである

この新しい予言者の任命は、神を信じるすべての人、特に主イエス・キリストを信じるすべての人にとって、重大な意味を持つ。私たちは低くへりくだる心とあふれるばかりの誠意を抱き世にこの厳かな宣言をするのである。

主がこの地上に御自分のものと認める民を持つときには、常に生ける予言者に天から導きを与えて民を導いて来られた。

昔、民が信仰深かったとき、全能者によって予言者が次々に立てられ、神による任命が連綿として続いた。こうして、旧新約聖書に述べられる大勢の神の人が出現したのである。

現在、同様の靈感に満ちた人々の系譜が打ち立てられている。末日の聖見者ジョセフ・スミスにより主イエス・キリストの福音が回復された結果がそれである。

予言者アモスは地上にいたときに、主は予言者を通してのみ主の民を導かれるという重要な言葉を述べた。「まことに主なる神はそのしもべである預



十二使徒評議員会会員
マーク・E・ピーターセン

言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない。」(アモス3:7) この言葉は神と人との交通を示唆しているので、特に興味深い。

一般に信じられている所と反して、主は交流の神、啓示の神である。光明と英知の神、知識と伝達の神である。主は闇の中で物事をなされず、無知のままではだれをも救われない。救いの全計画は知識を与えられた民との交流の上に築かれるのである。

無知のままでは、だれが理的に礼拝できるだろうか。

神を知らないで、だれが意味のある信仰を持てるだろうか。

また、もし神御自身からでなければ

その知識はどこから来るというのだろうか。

知識が神から来るとき、それは交流であり啓示である。

主は交流の神であるが、人に知識を送るときに特別な方法を用いられる。それは変わることのない経路である。すなわち主は、常に生ける予言者を通して民に語られる。

聖典には、主が何世紀にもわたって思いのまま自由に、人類に靈感による導きを与えておられたことが示されている。しかし、そのような啓示が止んだ時代があった。それは聖書の時代にもあり、イザヤはそのわけを説明している。

「見よ、主の手が短くて、救い得ないのではない。その耳が鈍くて聞き得ないでもない。ただ、あなたがたの不義があなたがたと、あなたがたの神との間を隔てたのだ。またあなたがたの罪が主の顔をおおったために、お聞きにならないのだ。」(イザヤ59:1, 2)

人間は主の道を悟るに遅い。そしてとくに、主は人と交流しようとしておられるが、その方法は予言者として指名された靈感ある人々を通してだという事実を、なかなか容易に受け入れない。

神は御自分の民をお見捨てにならない 神を捨てるのは民である

それが神との決まりである。それが神の方法であり、神はそれを変えてはおられない。神はきのうもきょうもとこしえに変わらず、神の方法もその通り変わらない。

人間同士の交流の欠如は世の多くの苦悩の原因となる。しかし神と人との交流が断えるとき、さらに深刻な事態が起きる。

昔主は、アダムの時代からバプテスマのヨハネに至るまで、代弁者として仕える靈感豊かな人々の系譜を起こして民に話そうという気持を示された。イザヤ、エゼキエル、モーセ、ザカリヤなど少しの名前をあげても私たちに周知のものである。彼らの書き物が人類最高の文学、万人の知る啓示、旧約聖書となった。

では新約聖書の時代についてはどうであろうか。このときも神は同じ方法をとられたであろうか。キリスト教会に予言者を置いて、旧約聖書に示された昔ながらのやり方をとられたのであろうか。

たしかにその通りである。

パウロはエペソ人に、イエス・キリストの教会は使徒と予言者という土台の上に建てられ、救い主御自身が隅のかしら石であると言った。(エペソ2:20)

その時代の予言者とはだれであったのか。

当然十二使徒が含まれる。しかしそのほかに予言者がいただろうか。

新約聖書には、その他の予言者たちがいたと書かれている。サウロとバルナバがそうであり、ふたりとも当時の偉大な宣教者であった。ほかにシメオンとルキオがおり、イスカリオテではないユダという名前の男もいた。マナソンとパウロの捕縛を予言したアガボも同様に予言者と言われている。(使徒11, 13, 21の各章参照)

エペソ人への書簡の中に、キリスト教の予言者がなげいたかについて、彼らは「聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ」るために主の教会に置かれたと述べられている。(エペソ4:12)

救い主は主の民に、天父が完全であるように完全になりなさいと言われた(マタイ5:48)ので、それが実現できる手段として主の教会を建てられた。そして教会に使徒や予言者を置かれたのである。

それらの靈感に満ちた人々は、聖徒たちの一致のために、また「もはや…様々な教の風に吹きまわされたり、もてあそばれたりすること」がないように、群れの分裂を鎮めるために教会に

置かれたのである。(エペソ4:14)

このように、主は旧約聖書に記録されている時代に一貫してとって来られたと同じ方法を、新約時代の主の民との交流に用いられた。

では私たちの時代はどうであろうか。

神と人との交通は初期のキリスト教会に欠くべからざるものであったが、現代のキリスト教会ではどういう状態であろうか。現在のキリスト教の予言者たちはどこにいるのだろうか。

悲しいことに、予言者は幾世紀にもわたっていなくなった。最後の予言者と信じられている黙示者ヨハネの消息がとだえるA. D 110年以後、キリスト教の予言者がいたという記録は皆無である。

それではそれからの歲月、キリスト教は天との交流なしにさまよってきたのだろうか。

ある宗派の人たちは予言者はいないと言い、もはや予言者も啓示も必要ないと教えている。彼らは、過去の時代に書かれた聖書に、必要なことはすべて記されていると言う。

それは、いにしえからの主の方法、すなわち主の民を生ける予言者が導くという方法と離反してはいないだろうか。

神はきのうもきょうもとこしえに変わらず、
神の方法もその通り変わらない

イザヤの時代に、神に背いた民があった。主がその民から顔をそむけたのではなかった。

救い主の時代も同じであった。主が御自分について次のように言われたのを思い出していただきたい。「……ちょうど、めんどりが翼の下にそのひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それなのに、おまえたちは応じようとしなかった。」(マタイ23:37)

神は御自分の民をお見捨てにはならない。神を捨てるのは民である。

「主われにたよるものの霊
敵の手には渡し得ず
地獄かれに迫るとも
われその霊を見捨てはせず
必ずわれは見捨てず」

(讃美歌96番)

私たちの愛唱する讃美歌にこう歌われている。

聖典には、末日の救い主の再降臨のすぐ前に、時のしるしが与えられると言われている。

それは海が己の力を超えて猛り、地震や災害やおびただしい死傷者を伴う戦争が起きるといった荒廃である。

しかし、時のしるしのうちで最も重要なひとつの出来事は、「神のさばきの時」になされる、初めのままの福音

とイエス・キリスト教会の回復であった。(黙示14:6, 7)

この回復は非常に大規模なので、聖典には「神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新」と言われている。(使徒3:21)

それでは、この回復に予言と啓示の回復も含まれるのだろうか。

騒然としたこの時代に、民を導く預言者の新しい系譜が起こされるのだろうか。

聖典に末の時代には新しい啓示が与えられると言われていること、また神は常にしもべである預言者を通して啓示を与えられること、さらに幾世紀間も預言者がいなかったこと、これらを通してみると、私たちの時代に対して啓示を伝えるには、新しい予言者が起こされなければならない。

このことがその通りに起きたのである。

ジョセフ・スミスがその系譜の初めであった。主は彼によって純粋なままの福音を回復され、1830年、教会が地上に再び建てられた。

以来その業を進めるべく、近代の預言者たちが続いた。それは主イエス・キリストの再降臨まで続く。

ジョセフ・スミスのあとはブリガム・ヤングが召され、次にジョン・テイ

ラー、ウィルフォード・ウッドラフ、ロレンゾ・スノー、ジョセフ・F・スミス、ヒーバー・J・グラント、ジョージ・アルバート・スミス、デビッド・O・マッケイ、ジョセフ・フィールド・スミスと続き、現在はハロルド・B・リー大管長である。彼らは皆当時の神の予言者であり、それぞれが皆聖見者、啓示を受ける者であった。

私たちはこの大会で、心と手をもってリー大管長を現代の靈感を受ける指導者として正式に支持した。

予言者の資格が今や彼に着せられた。彼は予言者たちに授けられた聖なる神権の権能を持つ。

天使から予言者ジョセフ・スミスに与えられた鍵と力のすべてがリー大管長に授けられた。彼こそが、今神より選ばれ、権能を受けた、予言者の長い系譜の継承者である。

この業は進みつつある。信じる民は救い主を受け入れる準備を整えている。キリストは再度来たりたもう／降臨に備えてキリストの教会がすでに回復されたのである。

モーセ、イザヤ、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、サウロ、バルナバ、パウロのような予言者を、私たちは再び地上にいただくのである。

再び真の救いが全人類に示された。

神は世から孤立しておられないと宣言する。
神は死んではおられない 生きておられる。
神はめしいではない 見ておられる。
神は耳しいではない 聞いておられる。
神はおしではない 話しされる。神の生ける予言者
に対して、また彼らを通じ世の人々に、自由に、雄弁に

そして再び、近代のしもべを通して
主は言われる。

「すべて重荷を負うて苦労している
者は、わたしのもとにきなさい。あな
たがたを休ませてあげよう。わたしは
柔和で心のへりくだった者であるから
わたしのくびきを負うて、わたしに学
びなさい。そうすれば、あなたがたの
魂に休みが与えられるであろう。わた
しのくびきは負いやすく、わたしの荷
は軽いからである。」(マタイ11:28-
30)

私たちを導くこの新たな予言者の系
譜によって、全人類に再び救いがもた
らされる。私たちは、神がこの末の日
に真実語られたこと、そして私たちが
神のしもべであることを証する。

いにしえの聖典は語る。「ああ、麗
しいかな、良きおとずれを告げる者の
足は！」(ローマ10:15)

あなたは考えたことがないだろう
か。この者はだれで、良きおとずれを
告げるのはだれで、だれの足が山の上
で麗しいのだろうか。

モルモン経のアビナダイは説明して
いる。

それは神の予言者である。平和の君
主なるイエス・キリストの福音を説く

者たちである。

アビナダイは言った。「……世界が
始まって以来起った聖い予言者……か
れらは平和を布き善の良い音ずれをも
たらし、救いを宣べひろめ、シオンに
汝の神は治めたもうと告げた者たちで
ある。それであるから、その足は山の
上にあっていかにも美しいではない
か。今現に平和を布く者たちの足も山
の上にあっていかにも美しいではない
か。また今から後とこしえに平和を布
く者たちの足も山の上にあっていか
にも美しいであろう。」

アビナダイは続ける。「ごらん、こ
ればかりではない。良い音ずれをもた
らして平和を起し、その民を贖いその
民を救いたもうた主の御足は山の上に
あっていかにも美しいではないか。」

(モーサヤ15:13-18)

アビナダイはこう語った。

予言者たちはイエス・キリストのし
もべであり、時の初めからこの地上に
いた。彼らはキリストのしもべで平和
の福音を説くゆえに、見よ、山の上に
あって彼らの足はいかに美しいか。

私たちは予言者をたたえる。予言者
に従い、予言者によって主の道に沿い
地上で自分の救いのために働くのであ

る。

私たちは歌う。(讃美歌83番)

「来たれ予言者より みことば聞け
喜びてうたえ 真理の道
昔の予言者の道を知りて
今、他の予言者を また送らる

大地をとざせる 暗きやみは
払われて神の み顔は出づ
世のまよいゆきし あやまち去り
聖徒らはついに 道見出だす」

この時代に、天と地との交流が再び
打ち建てられたことを、私たちは厳そ
かに証する。私たちは、神は世から孤
立しておられないと宣言する。

神は死んではおられない。生きてお
られる。

神はめしいではない。見ておられる
神は耳しいではない。聞いておられ
る。

神はおしいでない。話しされる。神の
生ける予言者に対して、また彼らを通
じ世の人々に、自由に、雄弁に。

神はこのように、今、あなたに話し
ておられる。神を認めよ。神に祈りた
まえ。神に従いなさい。主イエス・キ
リストの御名によって、アーメン。

両親のために

話す時間をとるなさい

ジョージ・S・デュラント

私はひとりの親として、自分に大きな影響を与えたことを3つ発見した。それは次のことである。

1. 自分が子供たちといっしょにいるときだけが、子供が自分に話しかけてくる時間である。
2. 子供が話したいことというのはみな大切なことである。
3. 子供に話すときよりも子供の話を聞くときの方がずっとためになる。

この3つの発見を実行することによって良い家庭の夕べが持てるというのが、私の経験から出た信念である。それを説明しよう。

一番目の発見は一見して何ともないあたり前のことのように聞こえるかもしれないが、この単純なことが、私が親として学んだうちで恐らく最も重要なことであると思う。また、ただ子供と一緒にいるだけでなく、子供が喜ぶことを一緒にするならば、子供はいつも私に話をしてくれるということも知った。多くの親たちが、どうして自分は子供と心を通じられないのかと考える。それはきっと子供たちと一緒に楽しく、くつろいで、ゆっくりと時間を過ごさないためであろう。忙しすぎてそれをしない人は、確かに忙しすぎるのである。

そう、私は子供と一緒に過ごさなく

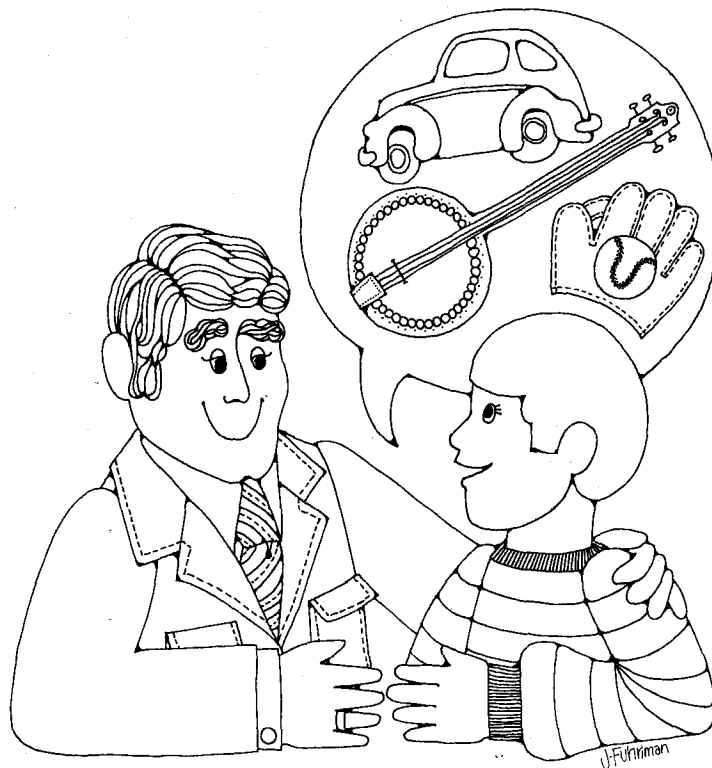
てはならない。それも、体がそこにいるだけでなく心が本当にそこにあるのでなければならない。

2番目の発見については、車や音楽やスポーツなど、いかにもささいな事柄について語り合うのは、深い交流などとても言えないと考える人があろう。しかし私は、子供とそのようなことを話すときに何か生まれ、親密感を感じることを知った。いつも何気ない話をして心を通わせていなければ、大きな問題について話し合おうと待っても、起こるはずのないことを待っているだけであろう。

また家庭の夕べについても、子供た

とが徐々にわかった段階で知ることのできた事柄である。少なくとも、子供はそのような答えを即座に求めはしない。子供にとっては、私の答えを聞くことよりも、彼らの質問を聞いて問題を語り合えることの方がもっと大切である。よく語り合うとき、私が気長によく聞きさえすれば、子供は私の答えをたいして必要としない。子供はすでに自分で答えを見つけているのである。

私がうろたえたりしないで耳を傾けて聞くと、一方通行のお説教ではない、意志が交流する家庭の夕べとなる。



ちの話したい事柄をとりあげて話す必要がある。私たちが話し合っているとき、私はいつも自分たちが大事なことをしているのだということを承知している。そのような話の中から、重大な事柄について教える機会が出てくる。

3番目は、おしきせでお定まりの答えを子供たちが求めているというこ

以上3つの事柄に、主の導きを求める熱心な祈りが加わるとき、私たちの最大の責任である親としての務めに成功が約束される。

デュラント兄弟はケンタッキー・テネシー伝道部伝道部長である。

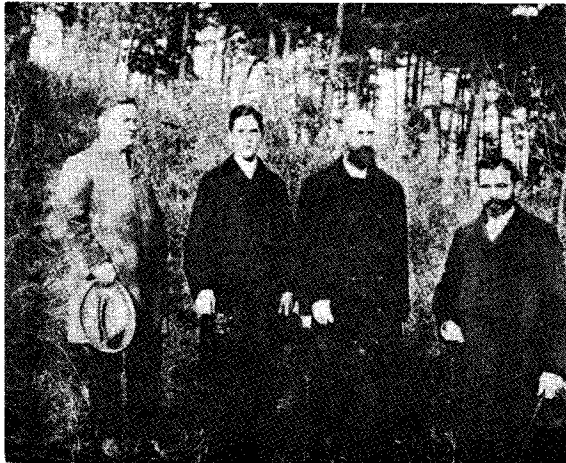
日本伝道略史

資料：THE LIGHT OF THE SUN

日本中央伝道部

1901

日本の地にて伝道開始される 初めての宣教師、横浜に到着



ケルチ長老 アルマ・O・ティラー長老 グラント長老 エンサイレ長老

明治34年、8月12日早朝横浜の街には人力車が行き来していた。豊かな口ひげをたくわえた一行の指導者と見える年長の紳士と比較的若く、やはり体格の良いこれら4人の米国人が、日本に初めて足を踏み入れた末日聖徒の宣教師、ヒーバー・J・グラントの一行であった。

主なる神はこの日本の地に御言葉が宣べ伝えられることを欲したまい、ロレンゾ・スノー大管長を通してヒーバー・J・グラントを日本初の宣教師として召したもうた。……莫大な経済的犠牲をも省みず、感謝してこの召しを受けた時、神の靈感がグラント長老に臨み、不思議な方法で負債は支払われることになった。このようにして日本への伝道の道は無事開かれたのであった。1901年9月1日の朝、横浜の森で4人の長老たちは日本を「真理が宣べ伝えられて義が打ち建てられ、イスラエルの集合に関する主の目的の達成をもたらす地」として奉献した。その時のグラント長老の奉献の祈りを、同僚のテラー長老はこう記している。

「彼の舌はゆるまり、御霊が力強く彼の上にとどまり、神の御使いたちが、私たちのそば近くを囲んでいるのが感じられた。彼のくちびるからあふれでる言葉は、私たちの関節と骨の髄を貫き透し、私たちの胸は内に熱く燃えた。私はかつてこのように力ある、安らかでしかも力強い祈りを経験したことはなかった。私たちは喜びのあまり幼児のように泣いた」

日本人初のバプテスマ

1902

初めての一般集会が開かれる
モルモン経、日本語に翻訳開始
讃美歌、日本語に翻訳開始

1903

1904

1905

1909

モルモン経日本語訳初版発行

4月、宣教師たちの働きの最初の実実は中沢はじめ氏のバプテスマであった。彼は神道の官主であったが、彼の真理を追求する姿勢は神道界に受け入れられず、むしろ追放される原因となった。彼に続いて宣教師の通訳者の広井氏がバプテスマを受けた。鈴木なみ、奈知江常、熊谷たまの姉妹などが教会員として活躍した。

「又此記録を受くる時、その真なる物なるや否やを、キリストの御名に託て永遠の天父なる神に問へ。若し誠心誠意に且キリストを信じながら問はゞ、神は聖霊の力に由て此記録の確実なることを汝等に示し給ふべし。」

信仰簡条、850枚発行
日本語版讃美歌初版発行

1915

初めて教会幹部が来日、後に大管長になったデビッド・O・マッケイとヒュー・J・キャノン長老である。日本伝道の開拓時代の宣教師のひとり、ルイス・H・モロア長老は当時のようすを家族に手紙で知らせている。「私たちには解決を迫られている大きな問題があります。ここの人々はたしかにかたくなです。彼らが謙遜になって福音を受け入れるようになるには何かが起きるでしょう。——中略——日本はドイツのようになりつつあります。日本人は戦争のことばかり考えています。少女たちはみな看護婦になり、少年たちは兵隊になるようにと訓練されています。子供でさえも戦いの話をします。いつか日本がアメリカと戦うときが来るかのようです。できることならそのような事態にならないように私たちはただ祈るばかりです。(以下略)」戦争の気運は高まり宣教師に対する迫害も激しさを増してきていた。

この年ついにヒーバー・J・グラント大管長から日本に1本の電報が入り、23年間続いた日本伝道史の第1巻はいったん幕を閉じることになった。これまで132人の日本人がバプテスマを受けたが中心となって活躍しているのは12人ほどであった。宣教師がひきあげ教会の組織を取り去られてしまった聖徒たちは、奈良富士哉兄弟(日本初の長老に召されていた)たちを中心に集まっては福音の勉強をし、独自のMIAを開き続けた。奈知江常姉妹、熊谷たまの姉妹、鈴木なみ姉妹も熱心な会員であった。当時の様子を奈良兄弟は次のように語っている。

1924年8月、日本伝道部が閉鎖するの已むなき事情にありまして、これが公表されたことによって、宣教師の方々はさぞかし残念なことであったと思われます。従って私達会員は断腸の思いでした。

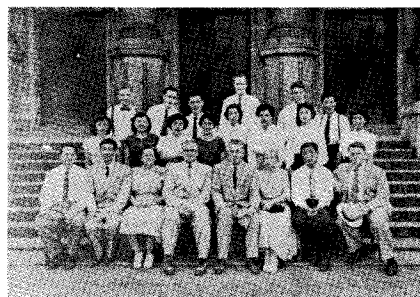
信者一同結集して日本伝道部の再開を懇願、1926年10月には東京、大阪、札幌にMIAの開設が正式に許可さ

れました。次いで相互連絡の機関誌として毎月「しゅろ」というパンフレットを発行し、専ら信仰の冷却を防いで参りましたが遂に力つきて4年位で中止になりました。

会員間の連絡等は日本の国策に制圧されて自由がきかなかったことは言うまでもないことでした。

相い継ぐ戦争と恐慌により日本人は大きな痛手を受けていたが、かえってそれが福音を受け入れる謙遜さをもたらしたかのようであった。1945年終戦と共に新駐軍が日本中を往来した。はじめは恐れといふかしきで敵視していた日本人たちも、これら外国の兵隊たちが非常に気だてのやさしい親切な人々であることを知った。軍の末日聖徒を通して教会は食糧を救援した。末日聖徒の軍人たちの生活と模範は日本人たちの心をひきつけた。後に教会の翻訳者となった佐藤龍猪兄弟家族が改宗したのはその好例である。(1946年)

十二使徒のカウリー長老は「日本人は全世界にあって義を思い出される民となる」との予言と祝福の言葉を残された。



リー長老と
宣教師たち

1920 デビッド・O・マッケイ、ヒュー・J・キャノン長老、来日

1923 関東大震災
1924 伝道部閉鎖

1945 第2次世界大戦終結
1947 エドワード・クリソード伝道部長に召される

1948 日本伝道部再開

1949 マシュー・カウリー長老来日

1950 婦人会開かる

1953 日本人宣教師召される
1954 ハロルド・B・リー長老来日

日本伝道部が、北部極東伝道部に改められる

アンドラス伝道部長着任
聖徒の道出版

ゴードン・B・ヒンクレー長老来日

新訳日本語版モルモン経発行

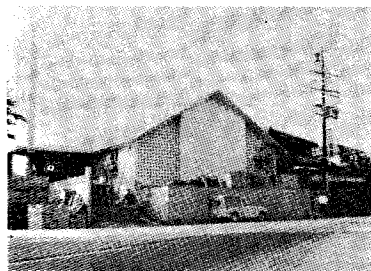
アンダーセン伝道部長着任
教会堂の建築着手される

東洋初の白亜の教会堂完成、東京
西、北、南、東支部の献堂式がヒ
ンクレー長老、ハックス長老によ
り行なわれる

東京オリンピック

小松伝道部長着任
第1回ハワイ神殿訪問

ヒュー・B・ブラウン長老来日



完成近い阿倍野支部

日本初のユース・コンファレンス
開催（8月）

1955

1956

1957

1962

1964

1965

1967

1968

この年、後に10代目の大管長になったジョセフ・フィールドینگ・スミスにより沖縄が伝道の地として奉獻された。

この時代に教会堂建築の基礎がしかれ多くの土地が教会用地として購入された。

第9代クリソールド伝道部長（再開初代）は、「出来るだけ多くの人々が福音を知るために、わかりやすい日本語に翻訳する」という意図の下に、佐藤龍猪兄弟を翻訳者として任命、それに関して按手礼が行なわれ、1909年8月以来、幾多の兄弟姉妹の援助を得て1957年5月30日に、教義と聖約、高価なる真珠と共に出版された。

さて、1909年10月10日に、最初のモルモン経が出版されるに至った折のことを簡単にふり返ってみる。1904年1月11日翻訳計画が成され、アルマ・O・テラー長老にこの責任が与えられた。最初訳文をローマ字で書き、これを日本字に直した。最初の翻訳は2年足らずで完成したが改訂を施すために1906年から1年間かかった。これまで訳文は口語体で書かれていたが、当時の日本人達は文語体でなければならないと強く主張。というのも、当時訳文を良い口語体に出来る人が日本に2、3人しかいなかった。この訳文の批評を、テラー長老は、坪内逍遙及び夏目漱石の二氏に依頼したが時間がないからと断わられた。しかし、その代りとして夏目氏は東大卒の生田広春氏に依頼する様助言された。こうしていよいよ1909年10月10日に翻訳が完成。全部で5,000部印刷、発行されたのである。



ついに初のハワイ神殿訪問の夢が実現。訪問の費用を助け合うため、日本の聖徒たちは一致協力、その限りを尽くして働いた。真珠の販売「日本の聖徒は歌う」のレコード吹きこみなども心暖まるすばらしい思い出として日本伝道史の一コマを飾っている。

4月、大管長会よりヒュー・B・ブラウン長老を迎えて、横浜、札幌、阿倍野の各支部が献堂された。阿倍野大会において語られたブラウン長老の日本の将来に関する記念すべき予言と祝福の言葉は、それ以来、日本の聖徒たちに靈感と勇気と励ましを与え続けている。

「今晚、私の話に耳を傾けていらっしゃる皆さん方の中の何人かは、日本人の男の方が教会の十二使徒評議員会の一員になるその日を、その目で見るにちがいありません。（略）そして世界各国の人たちが強大な組織を作られ、日本人の皆さん方のある人たちは教会の指導者になるにちがいありません。私は今晚自分の心の中にそれをひしひしと感じます。私はこの予言を主の御名によっていたしたいと思います。」

ベンソン十二使徒が極東を管理することになり、七十人最高評議員会の一員、マッコスキー長老がアジアのすべての伝道活動の管理者となった。ベンソン長老は少年の頃から近所のさとうきび畑で熱心に働く日本人を見ては親しみを覚え、日本人を愛していた。

北海道から沖縄までの末日聖徒の若人が東京に集まり、スポーツ、演劇、音楽など盛りだくさんのプログラムに参加し、価値ある3日間を過ごした。この大会にはベンソン長老も参加された。主の御業がフルスピードで進展したこの時期には、中央管理会の姉妹たち

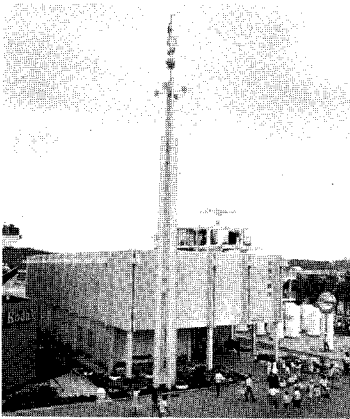
も来日した。パームリー姉妹（初等協会会長）、ジェイコブセン姉妹（YWMI A会長）、スパッフォード姉妹（扶助協会会長）である。日本の聖徒たちとの靈感あふれる会見の様子をジェイコブセン姉妹はこう語っている。

「MIAの会長の佐藤兄弟姉妹たちとガールズプログラムのことについて話していたときでした。かれらは日本語で質問してきたにもかかわらず、私にはその質問の意味が理解できました。このとき実にふしぎなことが起きました。私はその質問に通訳をまたずにすぐ答えると、小松部長が『なぜあなたは答えることができましたか』とけげんな顔でたずねました。……それは本当にふしぎな経験でした。会が終わってしまったあともそれはそこに集まったすべての人々の胸に焼きつけられていました。』

日本伝道部と日本沖縄伝道部に分かれた。

3月15日、日本伝道史上決して忘れることのできない歴史的な出来事が起こった。東洋初のステーク部が組織されたのである。そして日本の伝道部はさらに4つに分轄され、日本東伝道部、日本伝道部、日本中央伝道部、日本西部伝道部となった。日本の地で改宗し日本の地で専任宣教師として伝道の経験を持つ渡辺兄弟姉妹が西部伝道部長に召されたことは日本人聖徒にとって大いなる感激であった。

ステーク部が設立の記念すべき安息日の朝、聖徒の胸に湧いた感激の底にはまた新たなチャレンジ、「さあ、次は神殿だ！」であった。



モルモンパビリオン

10月、350人余の聖徒たちがソルトレーク神殿を訪問し、ジョセフ・フィールドینگ・スミス大管長をはじめ日本にゆかりのあるすべての指導者たちがテンプルスクウェアのアセンブリーホールに会し、靈感あふれる断食証会を持った。数百名の兄弟姉妹がエルドレッド・G・スミス大祝福師をはじめとする祝福師たちから祝福を受けた。その後多くの若い日本人聖徒が専任宣教師としての伝道に召されていった。

3月、渡部正雄兄弟が永遠の宣教師といわれるリグランド・リチャーズ長老により東洋初の祝福師として召された。

8月11日、十二使徒のゴードン・B・ヒンクレイ長老を迎え、ハワイのライエに日本人向けの訪問者センターが開設された。

これはハワイを訪れる日本人観光客の急激な増加に対処するために設けられたもので、日本語版の映画や説明用のテープが備えられている。開館時間は午前10時から午後7時までで、それ以外の場合には特別な予約が必要である。（8月11日は、1901年に宣教師が初めて日本に上陸した日を記念したもの）

1968

1970

伝道部が2つに分割
東京ステーク部組織

日本万国博覧会
ソルトレーク神殿訪問

1971

祝福師召される

1972

大阪ステーク部組織

1973

日本名古屋伝道部新設

日本人向け訪問者センターがハ
ワイに開設

1901年に主の御手がさしのべられて以来72年、日本各地にシオンが建てられ、その業は止まることを知らない。

、変化の時代に生きる私たちにとって家庭を堅固にすることが唯一の悪より守られる道であること
を12代目ハロルド・B・リー大管長は厳しく警告し続けている。

